

# ウッドロウ・ウイルソンと十八〜十九世紀英米の政治思想

## ——民主主義と専制、古代ギリシア、オスマン帝国をめぐる——

Woodrow Wilson and the Political Ideologies of 18th- and 19th-Century Britain and America: His Concepts of Democracy and Despotism, Ancient Greece, and the Ottoman Empire

森 まり子  
MORI Mariko

### 要旨

本稿はウッドロウ・ウイルソンと一八〜一九世紀英米の政治思想との関連を考察するものである。以下要約に代えて目次を掲げる。

はじめに

一 本稿の問題意識とウイルソンの青年期の思考の概観

(一) ウイルソンの知的経歴——概略

(二) ダヴィッドソン・カレッジとプリンストン・カレッジ時代に吸収した思想

(三) ギリシア古典に影響されたウイルソンの「民主主義」像とオスマン帝国

観——概略

二 民主主義と専制に対するウイルソンの考え方——フランス革命観

三 古代ギリシアの勉強がウイルソンに与えた影響——民主主義と専制への考え

方

(二) ヘロドトスの『歴史』

① 民主制の特色

②自由・平等・民主制の価値と自由を守る戦い

③ヨーロッパとアジアの二分法

(二) ウィリアム・スミスの『ギリシア史』

①古代ギリシアの民主主義と愛国主義 (スミス執筆部分)

②コンスタンティノープル陥落、オスマン帝国治下のギリシア、ギリシア独立戦争 (フェルトン執筆部分)

(i) コンスタンティノープルの陥落

(ii) オスマン帝国治下のギリシア

(iii) ギリシア独立戦争

四 ウィルソンとオスマン帝国——東方問題とグラッドストンの人権外交をめぐる

(一) ウィルソンのグラッドストンへの傾倒

(二) グラッドストン「ブルガリアの恐怖と東方問題」の概要

終わりに

### はじめに

ヴェルサイユ講和体制をはじめとする第一次大戦の一連の戦後処理は今日の東中東から中東に至る広域的な地域の国境線の原型を画定した。

この時の境界線がもたらした多民族・多宗教・多宗派地域の分断は、「イスラーム国」の活動に象徴される今日の中東地域の政情不安定にも深く連動している。<sup>1)</sup>

ところでE・H・カーは『危機の二十年』の中で、ウィルソン米大統領をはじめとするヴェルサイユ講和会議の指導者たちが十八世紀ヨーロッパ思想の影響を強く受けていた事を指摘している。<sup>2)</sup> ウィルソンが東中東や中東の戦後処理を考えた時の最大の関心事は、これらの地域を「民主化」する事により戦争を再び起こさない国際政治の構造をつくり出す事にあつた。しかし米国人である彼の考えた「民主主義」は、当時の史料を繙くと普遍的な装いを帯びながらもその内実は「普遍」や「中立」には程遠く、暗黙裡に「米国的」「西欧的」であつた事が読み取れる。

ここで「米国的」及び「西欧的」と表現される価値観は、共通性を多く持ちながらも重ならない部分がある事に注意せねばならないが、ウィルソンが青年時代を送つた十九世紀後半の米国は西欧、特に英国の政治思想の深い影響を受けていた事は間違いなく、実際一八五六〜八〇年の史料によつても、スコットランド系アイルランド人 (Scotch-Irish) の家族に生まれた彼が、自らが生を受けた米国の思潮のみならず英国思想の深い影響を受けて育つた事が跡づけられる。<sup>3)</sup> この意味で、ウィルソンが後に構想した第一次大戦後の世界秩序が、最も多感な時期に吸収した十八〜十九世紀の英米の政治思想に寄り添う形での「民主主義」に基づいていた事は不思議ではないであろう。この点でカーの指摘は充分根拠を持っていると考えられる。

しかし本稿の問題意識は、カーの指摘の正しさを改めて考究するにとどまらない。本稿の問題意識の原点は、この十八〜十九世紀の英米の民主主義観に沿ってウィルソンが明示的な形で示した八米国型民主主義

が今も米国によって強く主張される事によって、非英米的な政治観を持つイスラーム圏、ロシア、中国などの地域と米国との間に分断をもたらしているのではないか、という点にある。本稿はこの問題意識を念頭に、ウィルソンと十八～十九世紀英米の政治思想の關係の一端を、民主主義と専制、古代ギリシア、オスマン帝国という三つの要素に対するウィルソンの青年期の思考をたどる事によって考察しようとするものである。

## 一 本稿の問題意識とウィルソンの青年期の思考の概観

本論に入る前に、冒頭で述べた問題意識をより詳しく掘り下げる必要があるが、それにあたってまずウィルソンの青年期の知的経歴について概略を述べる。

### (一) ウィルソンの知的経歴——概略

ウッドロウ・ウィルソンは一八五六年十二月二十八日にヴァージニア州スタントンに生まれ、後にジョージア州アウグスタやサウスカロライナ州コロンビアに転居している。彼は、父が長老派の牧師であり、イングラッド生まれの母の父がグラスゴウ大学の卒業生であった事から、スコットランド啓蒙主義の影響を強く受けた事が推測される。<sup>4)</sup> スコットランド啓蒙主義の知的雰囲気を感じた家庭に育った事はウィルソンの民主主義観を考える上で重要であるが、彼の場合、それに加えて南北戦争期の南部で幼少期を過ごした事も彼のその後の政治的思考に重要な痕跡を

残している事を指摘できる。<sup>5)</sup> 但し本稿では、当時の米国に特有の事情に由来する思想的要素については扱わず、当時の米国の教育における英国的要素（つまり米国と英国に共通していた要素）の一部に限局して考察する事をお断りしたい。

ウィルソンは一八七三年九月にノースカロライナ州のダヴィドソン・カレッジに入学するが一年次しか在籍せず、一年間の受験準備を経て一八七五年九月にプリンストン・カレッジに入学し、歴史学や政治学を学ぶ。一八七九年六月にプリンストンを卒業後、同年秋からヴァージニア大学へ法学を学ぶ為に入学するが、病気のため一八八〇年に退学する。<sup>6)</sup> この頃までにウィルソンは自らの情熱が無味乾燥な法学よりも政治に向いている事を見定める事になるが、本稿で考察する彼の青年期とはこの一八七三～七九年のおよそ六年間である。

### (二) ダヴィドソン・カレッジとプリンストン・カレッジ時代に吸収した思想

ウィルソンのこの六年間の知的軌跡を克明にたどる事のできる一次史料 *The Papers of Woodrow Wilson, Vol. 1* には、彼が大学で履修した科目のメモが含まれている。当時の米国の大学の講義科目には数学・論理学・化学・物理学・鉱物学・形而上学・修辞学・天文学などと共に、キリスト教やギリシア語・ラテン語の古典が含まれていた。例えばダヴィドソン・カレッジ一年次のコースを記した彼のメモによると、旧約聖書の歴史、英語、ギリシア・ラテン文法などの科目名が見られ、ラテン語では

キケロを、ギリシア語ではクセノフォンやヘロドトスを読む授業があった事が分かる。<sup>(8)</sup>翌年彼が在籍をやめた時、家に持ち帰るべき本のメモには数学や歴史学の本と共に、ギリシア語・ラテン語の辞書と文法書、ギリシア語散文、クセノフォンの『アナバシス』、ヘロドトスが挙げられている。<sup>(9)</sup>又プリンストンに移ってからは、学部生は全般に知的に平凡な教育を受けていた事が彼の講義ノート等から窺われ、彼を含めて学生は大体独学していたらしい一方、ギリシア語・ラテン語の古典等の「日課として行われる復誦」(recitation)に励んでいた事も日記から窺われる。

彼の日記にあるリーディング・リストにはプラトンとアリストテレスの広範な著作やキケロの名が見える一方、ロック、ヒューム、ハミルトン、カント、デカルト等も含まれている。更に彼が詳細に読んだ事が分かっている本としてバーク、バイロン、カーライル、トーマス・マコーレイ、ミルトン、シェイクスピアの諸著作、及びウィリアム・スミスの『ギリシア史』等がある。つまり彼は所謂西洋古代の古典と共に、西欧近世及び彼にとつての同時代に近い時期の西欧の古典(大半は英米のもの)を幅広く読んでいたと言えるだろう。上記のうちバーク、カーライル、スコットランド系の歴史家マコーレイ、シェイクスピア、スミスの『ギリシア史』は、当時の彼が関心を持って日記に特筆している人々と著作であり、他にもギボンの『ローマ帝国衰亡史』を読み進めていたという日記の記載もある。<sup>(11)</sup>

以上を概観すると、ウィルソンの大学時代の勉学の特徴として、アジアや東欧についての勉学が殆どなく、専ら西欧思想に勉学が偏っていた

事実が浮かび上がってくる。プリンストンの同級生と彼は深い絆で結ばれるが、後に各界で活躍する一八五〇年代生まれのウィルソンの同級生らが、ギリシア・ラテン古典とギリシア・ローマ史、及びアングロ・サクソンの政治思想や歴史学に偏った教育を受けていた事は、彼の世代の米国の政治指導者が米国と世界を牽引しつつ生み出した第一次大戦の戦後処理と、戦間期以降の世界に彼らが広めようとした「民主主義」の性格を考える上で示唆に富んでいる。

### (三) ギリシア古典に影響されたウィルソンの「民主主義」 像とオスマン帝国観——概略

ウィルソンらが大学時代に学んだギリシア古典は、歴史学と文学の素養であるにとどまらず、米国の建国の理念であった民主主義のルーツと理想像に対するイメージを学生の心の中に形成する役割を果たしていた事が彼の日記から窺われる。例えば後述するヘロドトスの『歴史』は、当時の学生に、ペルシア戦争で「ヨーロッパ」たるギリシアが「アジア」たるペルシアを破り得たのはアテネの民主制が強い愛国心を生んだからであり、民主国家は専制国家を愛国心で凌ぐ故に軍事的にも強大になり得るのだという歴史像を植え付けるに充分な、現代的メッセージを持つ古典であった点で注目される。

また前述の様にプラトンの著作もリーディング・リストにあるが、大学のジュニア段階で講じられる事もあった『ソクラテスの弁明』や『クリトン』<sup>(13)</sup>は、民主政治の本質に「法による統治」がある事を学生達の心

の中に強烈に植え付けたと考えられよう。

更に注目されるのは、ウィルソンがプリンストンで復讐があったと記しているスミスの『ギリシア史』<sup>13</sup>である。同書は全体の九割近くがストア派あたりまでの古代ギリシアについての叙述に割かれており（古典・古代の専門家である英国のスミス博士が一八五四年に刊行した部分）、「ローマの征服から現在までのギリシア」と題する残り一割強の部分がハーヴァード大学のギリシア文学の教授であったフェルトンが補足的に執筆した部分である（全体として一八五七年に刊行）<sup>14</sup>。フェルトンによる補足章ではコンスタンティノーブルの征服後オスマン帝国下に組み入れられたギリシアと、独立に向けてのギリシア民族の「覚醒」が重点的に描かれている。この通史からウィルソンら学生が導き出した歴史像は恐らく、「古代ギリシアには卓越した民主制があったが、西ローマ帝国が滅びた後、古代ギリシアの思想を記したギリシア語文献は忘れられた。更にイスラーム教徒のトルコ人がコンスタンティノーブルを征服した後、かつて栄光ある歴史を誇ったギリシアはオスマン帝国による掠奪や苛斂誅求により荒廃した。しかしギリシア人は近代に覚醒し、野蛮なトルコ支配に対して立ち上がり独立を勝ち取った」という類のものであり、プリンストンの学生達は民主主義をつくった民族の隷属と覚醒の歴史を、英国から独立した自国の歴史と重ね合わせたであろう事が容易に想像される。更に、同書を通読した学生達は野蛮で専制的なアジアに対する民主的なヨーロッパの勝利という、ヘロドトスが描いたペルシア戦争の構図とも自然に重ね合わせたであろう。

この様に大学時代のギリシア史の勉強が民主主義と専制、ヨーロッパとアジアという二分法をウィルソンに植え付けた可能性に本稿では特に注目したのである。古代ギリシアの民主主義は、彼にとって直近の時代の大事件であったフランス革命を、イギリス市民革命と比較しつつ理解する際の暗黙の概念モデルとなった様に見える。また専制と民主主義の截然たる区分、更に「専制のアジア（など非西欧世界）、民主主義のヨーロッパ（米国と西欧）」という二分法的発想は、第一次大戦後のオスマン帝国の解体に大きな役割を果たしたウィルソンの思考法や、米国の政治指導者の戦間期のロシア革命観とも通底する様に見えるのである。以下、この様な長期的見取り図を念頭に、古代ギリシアの勉強がウィルソンの観点をいかに形成し得たかを考察する事としたい。

## 二 民主主義と専制に対するウィルソンの考え方——フランス革命観

ギリシア古典やギリシア史が彼の民主主義観にいかに関与したのかを考察する前に、彼が直近の時代の民主主義に関わる政治的出来事をどの様に捉えていたのかを見ておきたい。学生時代の彼が大きな関心に向けたのがフランス革命であった。以下、プリンストン卒業直後の一八七九年九月四日頃に執筆したエッセイ「フランスにおける自己統治」を概観する。

彼はフランス革命を未完の現在進行中の革命と捉え、英国と比較している。「イングランドでは自由はゆつくりと漸次的に勝ち取られてきた」

と述べる彼は、フランスの場合は隷属の縛りが急に暴力的に破裂したため、長く痛みを伴う変動をもたらしたのだと論じる。

旧体制下に存在していたフランス社会の際立った特徴は、あの最初のアーナーキーの日々——革命がその最も初期の、最も恐るべき仕事をなした日々であるが——の暗い背景に鮮烈に閃いている。イングランドも、海峡の向こうの近隣諸国の間に極めて勝ち誇っていると見たその精神を感じたのである。だがイングランドにおける改革の秩序正しい進进行を、フランスにおける革命の急展開と対比されたい。海峡の片側では我々は法が至高であるのを見出すのに対し、もう片側では力「が至高」である。イングランドでは偉大な諸改革は平和的な手段によって、討議の形成する力によって、法の限界内でなされている。フランスでは諸政府は力によって東の間支配し、結局力によって、殺戮や激しい変動のさなかに瓦解する。この様なコントラストには大きな意味がある。英国人の強みは数世紀にわたる自己統治によって築き上げられてきた。彼は年を重ね、それ故に自らの自由の行使と防衛に於て自制がきいている。他方、過去の全ての重みがフランス人を引きずり下ろすのに一役買っている。彼は疑似隷属の中で生まれ育ってきたのである。彼の伝統を遡る限り、彼と彼の先祖は、王と貴族——「つまり」全ての権力者の膝下に屈してきた。彼は義務しか受け継いでいない。「これに対し」イギリス人は特権の遺産をも持っている。政治的習慣のこれらの違いは非常に目立って明白であり……<sup>(17)</sup>

このくだりにはバークの『フランス革命の省察』の影響が明確に見てとれる。<sup>(18)</sup> 実際バークはウィルソンの若き日に最も影響を与えた思想家の一人であった。<sup>(19)</sup> 更にウィルソンは、「それ『旧体制下の中央集権』の影響の遍在について明確に理解するには、トクヴィルの『アンシャン・レジーム』を読みさえすればよい」ともいう。<sup>(20)</sup> 実際、以下の文章は、フランス革命が旧体制を打倒したにもかかわらず何故専制と暴力に転落していったのかについてのトクヴィルの議論をウィルソンがよく理解していた事を示している。「国家、中央政府が善についても——或いは悪についても——唯一の権力であるという考え方が非常に強くフランス人の心を捉えてきたので、革命の種子を蒔いた最も急進的な著述家たちでさえもその考えを払拭できなかった。彼らの最も先を行った願望の表明においてすらも、彼らは政治的自由ではなく一定の諸改革のみを求め、それらをもたらしべく国家を仰いだのであった。彼らの見解では国家は個人を形作り、今ある材料から新しい国民を彫り出す全ての力を持っている」<sup>(21)</sup>

フランス人にとっては国家が国民そのものであったと彼は総括し、ナポレオン一世のかつてないほど絶対的な専制などに言及しつつ続ける。「旧体制の他の非常に多くの特徴を破壊したにもかかわらず、革命はその巨大な中央集権体制を維持し強化しさえした。なぜなら革命は中央集権体制を公認したからである。……フランスの歴史は、革命の開幕以来、中央集権化された民主主義と、中央集権化された王制つまり帝政が交互に来るといふ記録以上のものでは殆どなかった——全てが事実上の専制

の影響力の事例なのである」<sup>(22)</sup>

この様な専制から国を守る為には地方自治が重要であると彼は論じる。中央集権化しすぎていると政府が倒れた際に地方官僚がたちまち無力となり、主人を失ったため孤立無援となってしまう。「首都パリが隅の要石をぶつ飛ばせば統治機構全体ががらりと倒壊するのである。パリは今や再び政府所在地であり、我々はそれ故、中央集権が完全な地方自治に取り換えられるまでは共和国の安全への我々の恐れを決して完全には払拭できない」<sup>(23)</sup>

強力な王権による専制の伝統のあるフランスでは法的限界の中の漸次的な改革に熟達しておらず、すぐ暴力に頼る。「フランス人は憲法的統治に慣れておらず、それと折り合っていない。彼らは憲法的改革の機構を操作する技術に長けていない。破壊は彼らにとつて修復よりも自然である。政府の政策が気に入らないと、彼らの最初の衝動はそれを破壊する事である。・・・議会制統治はフランスでは実践された事のない技術である。・・・自己統治はフランスにあつては今まで実験にすぎず、その行使も多年にわたり人々の習慣の中に確固として確立される様にはなり得ないでいる。確かに共和主義そのものが試されている。これまでもそれはフランス人の思考の中ではアナキーや流血と同義語である」。パークの議論を彷彿とさせる議論を展開したウィルソンは、共和国の安全は「中央集権の漸次的離脱と地方自治の最終的な確立」によって確保される、という結論に達するのであつた<sup>(24)</sup>

パークとトクヴィルの影響が明らかかなウィルソンのこのエッセイは、

フランスについて書いている様でありながら、実は民主主義の発展史における英国議会政治の卓越性を論じた<sup>(25)</sup>英国政治論でもあつたと言えよう。彼の英国議会政治への関心は一貫して深く、プリンストン在学中の一八七九年八月に英国議会政治との比較を意識した Cabinet Government in the United States という論考を執筆している<sup>(26)</sup>。彼の英国憲政史への見解はバジョットの『英国憲法』、彼が学生時代に夢中になつたマコーレイの『英国史』やグリーンズの『英国人の簡潔な歴史』などによつて育まれたものであつたが<sup>(27)</sup>、それらの見解に基づく彼の米國政治論（責任ある政治の為には徹底的な三権分立ではなく英国型の議院内閣制を採用する方がよいという趣旨）の考察は別の機会に譲りたい。

### 三 古代ギリシアの勉強がウィルソンに与えた影響——民主主義と専制への考え方

上記のフランス革命論からは民主主義と専制という二項対立的なウィルソンの発想が読み取れるが、本節では古代ギリシアの勉強からウィルソンが吸収した民主主義と専制への考え方を、彼が読んだ事が分かつている二冊の本をもとに更に考究する事としたい。二冊の本とはヘロドトスの『歴史』とスミスの『ギリシア史』である。

#### (一) ヘロドトスの『歴史』

スミスの『ギリシア史』では、ヘロドトスの『歴史』について次の様に説明している。「かの素晴らしい著作の真の主題は、小アジアのギリ

シア人を含む最も広義のギリシア人種と、アジア人ら (Asiatics) との闘争である。これが同書の見取り図であり、イオやメーディアやヘレネーの物語に例示されているギリシア人とアジア人の間の古代の敵意について当時行き渡っていた概念に基づいている。かくしてこの歴史家は壮大な叙事詩の主題を自らに対して提示したが、その主題はギリシアに対する企図におけるペルシア人の敗北によって、自然かつ栄光に満ちた終幕に持ち込まれたのである。<sup>(20)</sup>「アテネに対するヘロドトスの愛と賞賛は彼の著作全篇を通じて明らかである。彼は全身全霊でアテネに味方し、アテネをギリシアの自由の救世主であると宣言した」。<sup>(21)</sup> スミスは、ヘロドトスの叙述はトゥキュデIDESのそれと比べて実証性の不足も指摘されているが、自らの観察で書いている事は本物であり、かつてはあり得ないと考えられていた箇所も今では立証されている部分があるとして、「要するにヘロドトスは歴史学のホメロスなのである」<sup>(22)</sup>と評価している。

ウィルソンはスミスの解説からヘロドトスの『歴史』についての基本的なイメージを持ったと思われるが、彼がギリシア語で繙いた『歴史』の内容はいかなるものだったか。以下では右記のスミスの概評を念頭に、民主制の特色、自由を守る戦いという意識、アテネの愛国心、ヨーロッパたるギリシアとアジアたるペルシアの戦いが前者の勝利に終わる展開などの、ウィルソンに影響を与えたと思われる要素に注目しつつ、ヘロドトスの『歴史』の内容を概観する。

### ①民主制の特色

同書には民主制についての作者の高い評価が随所に語られているが、その評価が窺われる箇所の一つが以下に引用するカンピュセス死後のペルシアの国制についての論争である。オタネス、メガビュゾス、ダレイオスがそれぞれ民主制・寡頭制・独裁制を擁護するが、最後には独裁制が最善であるというダレイオスの主張が支配的になる、という内容である。<sup>(23)</sup>

オタネスは、国事をペルシア人全体の処理に委ねるべきであるとして次のように述べた。

「われらの内の一人だけが独裁者となることは、好ましいことでもなく善いことでもないのであるから、そのようなことははやあつてはならぬ、というのが私の意見である。諸子はカンピュセス王がいかに暴虐の限りをつくしたかを御承知であり、またマゴスの暴虐ぶりは身をもって知られたとおりだからだ。何らの責任を負うことなく思いのままに行なうことのできる独裁制が、どうして秩序ある国制たりうるであろう。このような政体にあつては、この世で最もすぐれた人物ですら、いったん君主の地位に坐れば、かつての心情を忘れてしまう。現在の栄耀栄華によって驕慢の心が生ずるからで、さらには人間に生得の嫉妬心というものがある。この二つの弱点をもつことにより、独裁者はあらゆる悪徳を身に具えることになるのだ。．．．独裁者というものは、ほどほどに讃めておくと仕え方が足らぬといって機嫌を損ねるし、余り大切に扱わずにば、へつらい者としてや

はり不興を買う。

しかし最も重大であるのはこれから私が申すことで、それは独裁者というものは父祖伝来の風習を破壊し、女を犯し、裁きを経ずして人命を奪うことだ。それに対して大衆による統治は先ず第一に、万民同権という世にも美しい名目を具えており、第二には独裁者の行なうようなことは一切行なわぬということがある。職務の管掌は抽籤により、役人は責任をもつて職務に当り、あらゆる国策は公論によつて決せられる。

されば私としては、独裁制を断念して大衆の主権を確立すべしとの意見をここに提出する。万事は多数者にかかつているからだ。」

オタネスがこのような意見を述べたのに対し、メガビュゾスは国事を少数者の統治（寡頭政治）に委ねるべきことを主張し、次のように述べた。

「オタネスが独裁制を廃するといったのには私も全く同意見であるが、主権を民衆に委ねよというのは、最善の見解とは申せまい。何の用にも立たぬ大衆ほど愚劣でしかも横着なものはない。従つて独裁者の悪虐を免れんとして、狂暴な民衆の暴戾の手に陥るといふがごときは、断じて忍び得ることではない。．．．さながら奔流する河にも似て思慮もなくただがむしゃらにかかつて国事を押し進めてゆくばかりだ。それ故に、ペルシアに害心を抱くものは民主政治をとるがよい。われらは最も優れた人材の一群を選抜し、これに主権を賦与しよう。もとよりわれら自身も、その数に入るはずであり、最もすぐれた政策が最もすぐれた人間によつて行なわれることは当然の理なのだ。」

メガビュゾスが右のような意見を述べると、三番目にダレイオスが自説

を披瀝して次のようにいった。

「私はメガビュゾスが民衆についていわれたことはもつとも思うが、寡頭政治についての発言は正しくないと思う。すなわちここに提起された三つの体制——民主制、寡頭制、独裁制がそれぞれその最善の姿にあると仮定した場合、私は最後のものが他の二者よりも遙かに優れていると断言する。最も優れたただ一人の人物による統治よりもすぐれた体制が出現するとは考えられぬからで、そのような人物ならば、その卓抜な識見を発揮して民衆を見事に治めるであろうし、また敵に対する謀略にしても、このような体制下で最もその秘密が保持されるであろう。しかし寡頭制にあつては、公益のために功績を挙げんと努める幾人もの人間の間に、ともすれば個人的な激しい敵対関係が生じ易い。．．．そこから内紛が生じ、内紛は流血を呼び、流血を経て独裁制に帰着する。これによつて見ても、独裁制が最善のものであることがよく判る。

一方民主制の場合には、悪のはびこることが避け難い。さて公共のことに悪がはびこる際に、悪人たちの間に生ずるのは敵対関係ではなく、むしろ強固な友愛感で、それもそのはず、国家に悪事を働く者たちは結託してこれを行なうからだ。このような事態が起り、結局は何者かが国民の先頭に立つて悪人どもの死命を制することになる。その結果はこの男が国民の讚美的となり、讚美された挙句は独裁者と仰がれることになるのだ。この事例から見ても、独裁制が最高の政体であることが明らかではないか。．．．」

右のような三つの意見が出たのであるが、七人の内四人までが最後の説

に加担した。・・・<sup>(30)</sup>

この引用部分は、アジアたるペルシアは民主主義が優れた国制である事を認めず依然として独裁制を選んだという構図を提示しており、欧米の読者に鮮烈な印象を与えた事が想像される。その「独裁のペルシア」 $\vee$ と巧みに対比されるのが、「自由・民主主義のアテネ」 $\vee$ なのであった。

## ②自由・平等・民主制の価値と自由を守る戦い

アテネは自由・平等・民主制を実現した事によって最強国家になったとヘロドトスは評価する。「かくてアテナイは強大となったのであるが、自由平等ということが、単に一つの点のみならずあらゆる点において、いかに重要なものであるか、ということを実証したのであった。というのも、アテナイが独裁下にあったときは、近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかつたが、独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となったからである。これによって見るに、圧政下にあったときは、独裁者のために働くのだというので、故意に卑怯な振舞いをしていたのであるが、自由になってからは、各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やしたことが明らかだからである」<sup>(31)</sup>

そして、ペルシア戦争は、専制帝国ペルシアからギリシアの自由を守る戦いとして一貫して描かれる。例えばミルティアデスは軍事長官カリマコスに次のように述べたという。「カリマコスよ、今やアテナイを隷属の地位におとしめるか、あるいはその自由を確保し、ハルモディオス、

アリストゲイトンの両名すら残し得なかつたような金字塔をうち樹ててこれを万世に伝えるか、一にかかつてそなたにある。今やアテナイは建国以来最大の危機に瀕している」<sup>(32)</sup>。又ギリシアからの使節一行はシユラクサイに着くと、ゲロンに謁見して次のように述べたという。「われわれはスパルタ、アテナイおよびこれと結んだ諸国から派遣され、ペルシア王に当るため、あなたの御協力を得るために参つたものであります。ペルシア王のギリシア進攻については、必ずやすでに御承知のことと思いますが、すなわちペルシア人めはヘレスポントスに架橋し、アジアより東方の全軍勢を率いてギリシアに兵を進めんとしているのであります。・・・されば願わくはギリシアの自由を守る者たちに援助の手をのべられ、ともに自由のために戦つていただきたい。すなわちギリシア全土が一丸となって結束すれば強大な勢力となり、優に侵入者と拮抗することができましょう」<sup>(33)</sup>。プラタイアの戦いでも、スパルタのパウサニアは敵が迫るとアテナイ軍に使者を送り、次のように伝えさせた。「アテナイ諸君、ギリシアの自由が守られるか敵に屈服するか乾坤一擲の戦いを目前に控えて、われらスパルタ軍と貴方アテナイ軍とは、同盟軍の裏切りにあい、彼らは昨夜の内に逃亡してしまつた。さればこれからわれわれのすべきことはすでに決定したとおり、互いに助け合つて力の限り戦うあるのみである。・・・」<sup>(34)</sup>

ヘロドトスはアテネがギリシアの自由を守る先頭に立つたとして賞賛を惜しまない。「かくてアテナイがギリシアの救世主であつたといつても、それは真実の的はずれたものといえぬであろう。事実アテナイ

が、いずれの側に与するかによって、運命の秤がいずれに傾くかが決せられる状況だったのである。そしてギリシアの自由を保全する道を選び、ペルシアに服せずに残ったあらゆるギリシア人を覚醒させ、神々の驥尾に附してペルシア王を撃退したのも、こそこのアテナイ人にほかならなかった。デルポイから伝えられ、アテナイ人を恐怖に陥れた恐るべき神託も、アテナイ人にギリシアの放棄をうながすには至らなかった。であり、彼らはあくまでも踏み留まり、自国領に迫る敵を敢然として迎え撃つたのであった。<sup>(35)</sup>

アテネのこの様な高貴さはアクロポリスに火を放ったペルシアの「蛮行」と対比的に描かれる。「これらのペルシア兵がアクロポリスに登ってきたのを見たアテナイ人は、あるものは城壁から身を投げて死に、あるものは神殿内に逃避した。登攀してきたペルシア兵はまず城門に向い門を開いた後、神の守護にすぎたものたちを殺した。アテナイ人をことごとく斃した後、ペルシア兵は神殿を掠奪しアクロポリスの全面に火を放ったのである」<sup>(36)</sup>。ヘロドトスが鮮烈に描くペルシアの行為を、ギリシア独立戦争時にオスマン帝国側（イブラーヒム・パシャ）がアクロポリスを破壊した「蛮行」と重ね合わせた十九世紀の読者は少なくなかったのではないかと思われる。

更にヘロドトスは、アテネひいてはギリシア同胞の血のつながりによる連帯心や愛国心を、皇帝に隷属的で自律的な愛国心を持たないペルシア人の心性と暗に對比させつつ余すところなく描き出している。アミュンタスの子アレクサンドロス（マケドニア人）は、ペルシアのマルドニ

オスから派遣されてアテネへ着き、アテネにペルシアと和解するよう説得したが、アレクサンドロスがアテネに到来したことを知ったスパルタ人は、アテネとペルシア王の和議を極度に恐れて即刻アテネへ使節を送った。<sup>(37)</sup>アテネ人はマルドニオス側には和議を断り、スパルタの使節団には次の様に答えたという。「・・・われわれの心を動かしてペルシアに加担しギリシアの奴隷化を望むようにしむけることはできぬことをよく知っておられるそなたらが、そのような危惧を抱かれるのは恥ずべきことと思われる。そもそも、よしわれわれが望むとしても、そのような行動をとるのを許さぬ重大な理由がいくつもある。第一の、しかも最も重大な理由とは、神々の神体や社殿が焼き払われ破壊されたことであり、われわれはこれに対して何としても敵に最大の報復を加えねばならず、このような非道を働いたものと和を結ぶどころの話ではない。第二には、われわれが等しくみなギリシア人同胞であり、血のつながりをも、言語を同じくし、神々を祀る場所も祭式も共通であるし、生活様式も同じであること、アテナイ人がこの同胞を敵に売ることとは許されることではあるまい。そこでもしこれまで御存じなくば今こそよく承知願いたい、アテナイ人の一人たりとも生き残っている限りは、われわれは断じてクセルクセスと和を講ずることはない」と。<sup>(38)</sup>

アテネの表明したこの同胞愛、生きている限り隷属ではなく自由を選ぶという高潔な宣言が、例えばウィルソンら学生にとって、自由と愛国心が分かち難く結び付いたアメリカ独立戦争と重ね合わせ得る印象的な場面であった事は想像に難くない。後にウィルソンとF・ローズヴェル

トが二つの世界大戦の前にそれぞれ大統領として宣言した「自由を守る戦い」<sup>(39)</sup>の精神的な原型は、直接的にはアメリカ独立戦争にあったと共に、更にその精神の根源をたどれば、十九世紀の英米の人文的な教養の中で広く読まれたギリシア古典——ヘロドトスの『歴史』——に由来するものでもあった、と言つてもあながち間違ひではないと思われる。

### ③ ヨーロッパとアジアの二分法

ヨーロッパたるギリシアとアジアたるベルシアの戦いが前者の勝利に終わる展開がヘロドトスの『歴史』の大きな特色であるが、ヨーロッパとアジアのこの二分法は随所に示されている。例えば「ベルシア人の言ひ分では、アジア側は掠奪された女のことなどは問題にもしなかつたのに、ギリシア人の方はスパルタ女の為に大軍を集め、アジアに侵攻してプリアモスの国を滅ぼしてしまつた。爾来ギリシアを自分らの敵であると考えているのだ、と。それというのも、ベルシア人はアジアとアジアに住む非ギリシア諸民族を自分に所属するものと見做しており、ヨーロッパとギリシアとは、それとは別個のものと考えているからである」<sup>(40)</sup>。但しヘロドトス自身、ヨーロッパとアジアという名称の由来や区分の根拠については複数箇所て疑問を呈しており、例えば次の様に述べている。

．．．リビアはその地方の土着の女リビア（リビュア）にちなんだ名であると多くのギリシア人はいつており、アジアはプロメテウスの妻の名に基

いたものという。しかしリュディア人はその名は自国のものであるといい、アジアの名称はマネスの子コテュスの子アシアスにちなんだ命名で、プロメテウスの妻のアシアの名に由つたものではない、サルデイスに住む民族、アシアスの名も同じ起原であると称している。「改行」またヨーロッパ（エウロペ）が．．．その名称をどこから得たのか、その命名者がたれであるかも明らかでない。われわれとしては僅かにこの地方がその名をテュロスの女エウロペから得たことをいい得るのみである。さればヨーロッパも他の二大陸と同様、以前は無名であつたに相違ない。ともかくエウロペなる女がアジアの出身であることは明らかで、この女が今日ギリシア人がヨーロッパと称している土地へきたことはなく、せいぜいフェニキアからクレタ、クレタからリュキアまでしかいつていないことも明白である」<sup>(41)</sup>。

この様に名称の起源は分からないとしつつも、ヘロドトスはこの区分を「ギリシアはヨーロッパ、ベルシアはアジア」という様に大雑把に適用し、ベルシア戦争をヨーロッパとアジアの戦争という大構図で単純化して描く事に成功している。「さて私の叙述はこれからは、．．．またベルシアはどのようにしてアジアの指導権を握つたかを語らねばならない」。「キュロスの夢にヒュスタスベスの長男が両肩に羽根をつけて現われ、一方の羽根でアジアを、他方の羽根でヨーロッパを蔽つたのである」。「われわれが．．．自国と全ギリシアを救うことができたのは、まことに思いがけぬ僥倖であつたのであるから、逃げる敵を追うのはやめようではないか。それというのも今度のことは決してわれわれの手柄ではな

い。神々や半神がたが、ひとりの人間——それも神を恐れぬ極悪非道な人間がアジアとヨーロッパとに君臨することを快しとされずになされたことなのだ。<sup>(43)</sup>

総括すると、以上見てきたヘロドトスの描き方、すなわち民主制は他の国制に比べて優れた特質を持つこと、その民主制は専制帝国であるペルシアでは採用されなかったがギリシア特にアテネが採用して最強の国を作る事ができたこと、ペルシア戦争はギリシアの体現する自由・平等・民主制をペルシアから守る戦いであったこと、ヨーロッパとアジアは区別されるのであり自由・平等・民主制のヨーロッパが専制のアジアを打ち破った戦争がペルシア戦争なのだというヘロドトスの歴史観が、ウィルソンら学生に与えた影響は多大なものであった事が想像される。ヘロドトスのこの様な白黒を明確にした叙述の特徴はスミスの『ギリシア史』でも強調されていたため、学生にとってはこの概説書から与えられた印象も相俟つて、原書の筋書きや趣旨が一層明確に印象づけられた事も想像される。それでは次に、ウィルソンらがテキストとして使用していた概説書、『ギリシア史』の内容を概観する事とする。

## (二) ウィリアム・スミスの『ギリシア史』

ウィルソンは大学での復誦にも使われた『ギリシア史』を興味深く読んだ事を日記に記している。一八七六年九月二十一日には「夕方、スミスのギリシア史を勉強した。この国の地理における変化と神話的時代の箇所である。全ての歴史「叙述」が私にとってそうである様に、それを

大変興味深いと感じている」と書き、十月十二日には「夕方はスミスのギリシア史とフォースターのゴールドスミスの生涯を読むのに費やした。私はスミス博士のスタイルが大好きで、彼の歴史はその長さにしては極めて卓越したものだと思う」と書いている。<sup>(44)</sup>

### ①古代ギリシアの民主主義と愛国主義（スミス執筆部分）

ウィルソンはプリンストンの一年次頃、関心のある用語を様々な文献をもとに説明したindex returnという辞典を作成しているが、その中に「民主主義」という項目があり、スミスの『ギリシア史』からの次の引用文を含んでいる。「植民地が民主主義の発展に有利だという事はしばしば観察されてきた。古代の習慣と慣習は本土と同様には植民地では保全され得ない。人々は必然的により大きな平等の上におかれる。なぜなら彼らは同じ辛苦を分かち合い、同じ困難を克服し、同じ危険に直面せねばならないからだ。故に、一人の人物やある階級が特有の特権を維持したり、他の植民者に恒久的な権威を及ぼす事は難しい。従って、我々はギリシア植民地の大半に於て本国におけるよりも早い時期に民主的な統治形態が樹立され、貴族制は短期間ですらその地盤を殆ど維持できなかった事を見出すのである」。<sup>(45)</sup>スミスの文章をこの様に引用しているところからも、ウィルソンが米国はイギリス植民地であったからこそ民主主義が発展したのだという思いをもって『ギリシア史』を読んでいた事、つまり彼が米国の歴史を古代ギリシア史と重ね合わせて理解していた事が推測される。

更に、ウィルソンは直接引用していないが、スミス執筆部分にはウィ

ルソンが西欧や米国の歴史と重ね合わせつつ読んだと想像される箇所が、先にふれたヘロドトスに対するスミスの評価(三(一)を参照)以外にも幾つかある。

例えば、「ギリシア世界を結び付けていた主な絆は血と言語の共同体、宗教儀式と祝祭の共同体、行動様式と性格の共同体であった。これらの中で第一義的に重要だったのが共通の出自と共通の言語を有している事であった。ギリシア人は全て人種と父祖を同じくしており、彼らは皆自分達をヘレネーの子孫だと考えていた。また彼らは皆、ギリシア的でない人々や都市を野蛮人という用語で描写していた」という、近代西欧のナショナリズムを恰も説明する様なくだりである。また、ギリシアの愛国心の特徴については次の様な叙述がある。「ギリシア人のパトリオティズムは彼の都市に限られており、ヘラスの共通の福利への一般的な愛に火がつく事は稀であった。・・・彼自身の都市の為に、愛国的なギリシア人は自らの財産と命を擲つ用意があったが」、ギリシア諸都市間は完全に分裂していたので国の共通の利益の為にそうする義務は感じていなかった。「ギリシア人が共通の危険という状況下で団結するのを難しくさせていたのが、この専ら自分の都市に向けられたパトリオティズムであった。この政治的分裂が彼らをして相互に武器を取らしめ、遂にはマケドニアの諸君主に従属させしめたのである」<sup>(47)</sup>。この箇所は、ウィルソンら当時の学生が、南北戦争に引き裂かれた米国の直近の経験を重ね合わせて読んだ事を想像させる。

更に、スミスが特筆するアテネの例も、民主主義の確立と愛国心には

関連性がある(自由と民主主義を犠牲を払ってでも守るという精神が生まれる)という事を考える材料を、ウィルソンら当時の学生に与えたかも知れない。恰もアメリカ独立戦争について述べているかの様にスミスはこう述べているのである。「アテネは今やその栄光に満ちた局面に入ったのだった。クレイステネスの諸制度はアテネの市民に、彼らの地の福利と偉大さへの個人的利害(関わり)を与えた。熱烈なパトリオティズムの精神が急速に彼らの間に湧き出た。そしてその殆ど直後にはペルシア戦争の歴史が来るのであるが、その歴史は、彼らが彼らの国家の自由と独立の為に払う用意のあつた英雄的な犠牲の顕著な証拠を示しているのである」<sup>(48)</sup>。

② コンスタンティノープル陥落、オスマン帝国治下のギリシア、ギリシア独立戦争(フェルトン執筆部分)

後半のフェルトン執筆部分の大きな特色は、直近の時代のギリシア独立戦争への今日的な問題関心から書かれている事である。ギリシア独立戦争については米国人もその大義に共鳴して支援した事が序文に言及され、ヨーロッパの東方の福利はギリシアキリスト教的な要素の将来における発展に大いにかかっていると期待をこめて執筆された事も示唆されている。すなわちフェルトンは圧縮した形ではあるが、民主主義を創始し、かつ中世にはオスマン帝国の圧政に耐え近代に独立を勝ち取ったギリシア民族への米国人的な共感をこめて、中世以降のギリシア史を執筆したのである。フェルトンの序文は、ギリシア古典が当時の米

国人にとつていかなる意味を持ったかについてもふれている点で注目される。「ギリシア文献の研究は文明世界全体にわたってリベラル教育の最も強力な媒体の一つである。古代ギリシア人の政治制度は自由な連邦の市民にとつて最も教育的な主題である。しかしこれらの研究を合衆国市民にとつて特別に重要に行っている特別な、かつ顕著な類似性がある。……古代ギリシアの歴史家、弁論家、詩人に息づく精神は英国と合衆国の様な憲法的統治の下でこそ最もその良さが評価され得るし、ギリシアの近代史を特徴づけてきた自由を求める闘争は、合衆国の様にヨーロッパの政治的紛糾から離れている自由な人々の間で最も心からの共感に出会ふのである。……独立戦争でアメリカがギリシアに対して行った援助は感謝に満ちた人々によつて忘れられてはいない」<sup>(49)</sup>

以下、フェルトンが米国との類似性への共感をこめて描き出したギリシアの歴史像の概略を、コンスタンティノーブルの陥落、オスマン帝国治下のギリシア、ギリシア独立戦争の三点に分けて見る事としたい。

(一) コンスタンティノーブルの陥落

西ローマ帝国の凋落後、東ローマ帝国はギリシア人・ギリシア文化を基盤とすべく変貌し、西欧ではギリシア語文献の知識が死に絶えたが、中世にはギリシア語の学問はビザンツ帝国外ではイタリアで保存された、とフェルトンは説明する<sup>(50)</sup>。特に十五世紀にギリシア人帝国の崩壊の危険が迫ると、イタリア諸都市にはギリシア人と多くの写本が流入した。ギリシア人学者らはコンスタンティノーブルの陥落と、「彼らの民族がトルコ人の専制に従属するのを」目のあたりにして西方へ逃れたのであ

る<sup>(51)</sup>。

そのコンスタンティノーブルの陥落を、フェルトンは征服者メフメト二世の人間像と共に鮮やかに描いている。「一四五三年にメフメト二世が虐殺された皇帝の屍を乗り越えてコンスタンティノーブルの町に入城し、聖ソフィアのドームに三月月を取り付けた」その時に至るまで、「千百年以上の長きにわたりコンスタンティノーブルは東方の偉大なキリスト教徒の都であった」ため、その陥落は「西欧のキリスト教諸国民に遍く衝撃を走らせた」<sup>(52)</sup>。

メフメト二世はトルコ人にしては上出来だが、残忍であったとフェルトンは描く。「メフメト二世は一四三〇年にアドリアノーブルに生まれ、一四五一年にムラト二世を引き継いだ。彼は彼の人種と年齢にしては尋常でない能力と教養を持った男であった。彼は五つの言語を解した。ギリシア人歴史家フランツェスは彼をムラトの宮廷で見た事があつたが、彼をエネルギーで能力があり、学問のある人々の集まりを愛好し、彼自身学問に無知ではなく占星術に耽溺していたと描写している。しかし彼は極度に残忍であり、無慈悲で放縱であつた。人間的なものであれ神のものであれいかなる考慮も、彼と、彼の欲望の充足との間に立ちただかる事はなかつた。……コンスタンティノーブルの征服は、彼の統治の開始時に、彼の思考がその上に固定された最初の目標であつた」。

一四五三年、「圧倒的なトルコ軍の優越性と若きスルタンの火の様なエネルギーの故に、抵抗が成功する希望は残されていなかった」。メフメト二世は皇帝に降伏を呼びかけたが、コンスタンティノーブルの陥落

後は生きて虜囚の辱めを受けぬ事を静かに決意していたコンスタンティノスは怒りに満ちて侮辱的な申し出を拒否する。五月二十九日、皇帝は暁の光の中で皇帝と認識されずにトルコ人に殺され、聖ソフィア教会に人々は避難した。「征服者らが手に刀を持って後に続き、街路で出くわす人々を虐殺した。彼らは教会の扉を斧で打ち壊してなだれ込み、．．．ありとあらゆる残虐行為を犯した」。フェルトンは凄惨な光景の目撃証言をも巧みに織り込む。「誰がその災いを描写できようか。子供達の嘆き、母と父らの涙と叫喚を誰が描写し得ようか。男たちは頭髪を掴んで引きずり去られ、召使いは女主人と、主人は奴隷と共に縛られ、太陽も決して見た事がない様な処女が引きずり去られて抵抗すれば殴られている」。犠牲者は兵士の間で奴隷として分けられ、掠奪が横行した。別の目撃者によると、「すぐに屈した人々は奴隷とされ、抵抗した人々は虐殺された。幾つかの場所では地面は死者で覆われた。奇妙な光景がそこにあつた——大声の悲嘆と、貴婦人たちを捕まえる計り知れない暴力。トルコ人によって教会から髪を掴んで情け容赦なく引きずり出される処女や、神に捧げられた修道女たち。子供達の悲鳴。——見聞されたこの恐怖を誰が描写し得ようか」。スルタンは教会に入り、聖ソフィアはモスクになるとムスリムに対して宣言し、皇帝の遺体を探し出して首をさらし、ギリシア人に見せる為に後で送るよう命じた。三日間掠奪は続き、その間に四万人が死亡し五万人が奴隷とされた。強制的に改宗させられた者も、命令に従わず家族ごと処刑された貴顕もいたといふ。<sup>53)</sup>

コンスタンティノーブル陥落後の征服活動の過程で起きた更なる悲劇

にもフェルトンはふれている。一四六一年のトレビゾンダの征服時には、コムネノス家の最後の皇帝ダヴィドは町を明け渡し、家族や財宝と共に自らのヨーロッパの所有地に退去した。廃位された皇帝は暫くは平和裡に住む事を許されたが、一四七〇年頃コンスタンティノーブルに連行され、イスラームに改宗するか、さもなければ死刑に処すと迫られたがその条件を頑なに拒否した。皇帝と七人の息子と甥のアレクシウスは処刑され、屍は埋葬されずに壁の向こう側へ投げ捨てられた。その遺体をひそかに埋葬した皇妃ヘレネは、短い余生を嘆きと祈りのうちに終えたのであつた。<sup>54)</sup>

フェルトンはコンスタンティノーブル陥落の部分、十五世紀の著述家ラオニコス・カルココンデイルスについての以下の様な簡潔な説明で閉じている。——アテネ生まれで一四四六年にムラト二世への大使として起用され、恐らくは十五世紀末頃まで生きてトルコ人によるコンスタンティノーブルの陥落、ギリシアの征服、トレビゾンダの制圧を目撃したカルココンデイルスは、コンスタンティノーブルに残ったか、この都市に秩序が回復された後に戻ったかし、古代の学風を維持する文人の小さなサークルの一つを形成したらしい。彼はトルコ人の起源からメフメト二世の征服までのトルコ人の歴史についての十巻本を書いたが、同書はギリシア人帝国の衰亡史の最良の史料の一つである。「歴史的な観点では、この非常に興味深い著作の最も傑出した部分は第八巻におけるコンスタンティノーブルの制圧と掠奪の、細部にわたる絵画の如く鮮やかな描写である。それはギボンがの大きな出来事に与えている莊重な構

図よりも心を揺さぶる。なぜならそれは、かくもすさまじい悲劇が同時代人の心の中に残したに違いないリアリティの感覚でもって書かれてい  
るから」であり、カルココンディラスが「『ピザンティウムのギリシ  
ア人に降りかかった出来事はかくの如くであった——そして私にはこの厄  
災は、世界で今までに起きた事のある全ての事を悲痛さの面で凌駕する  
様に思われる』と結論で述べる時、彼は読者を共感させ、我々は一民族  
の悲劇的な没落が常に引き起こさずにはいられない憐みと恐怖の感情を  
こめてこの本を閉じるのである」<sup>(35)</sup>。

## (ii) オスマン帝国治下のギリシア

コンスタンティノープルの陥落後イタリアに流入するギリシア人難民  
が増えた一方、メフメト二世はギリシア征服を進めた、とフェルトンは  
叙述を続ける。時々ギリシア人は闘争に於てキリスト教徒に味方し、「キ  
リスト教徒が征服されると彼らはトルコ人の手による最も野蛮な扱いに  
苦しんだ」。ロードス島は一五二二年にスレイマン一世によって、キプ  
ロス島は一五七〇年にセリム二世によって征服された。レバントの海戦  
にキリスト教徒は勝ったが、「キリスト教徒列強がこの大勝利に乗じて  
更に突き進んでいれば、恐らくトルコ人をアジアへ押し戻したかも知れ  
ない。しかし彼らは自分達の有利な点を追求する事を怠ったので、翌年  
スルタン・セリムは二百二十の帆船で再び海に繰り出す事ができたのだ」  
というのがフェルトンの評価であった。

「ギリシアは今やそれ以上の戦いもなくトルコ帝国に編入され、トル

コ人知事らの恣にされた。一六七〇年、トルコ人は二〇年近く続いた戦  
争の末に、ヴェネツィア人から重要なクレタ島を奪って征服した」。ヴェ  
ネツィアのメロシーニが一六八七年にギリシア人の援助を得て一時アテ  
ネを占領しトルコ人を追い出した。トルコ人はパルテノンの中に弾薬を  
貯蔵していたので、爆弾が、その当時までは保存状態がよかったこの「素  
晴らしい芸術作品」の中央部分を崩壊させ、アクロポリスの全木造建築  
は大火で焼失し、守備隊は降伏した。トルコ人は妻子と共に出立する準  
備の為に五日の猶予を許され、三千人が去った。しかし三百人のトルコ  
人ムスリムが退去より改宗を選び、カトリックに改宗したという話もあ  
る、とフェルトンは記す。

その後トルコ人は失地回復の為の大攻勢をかける。「一七一五年、ア  
フメト三世の大宰相は十万の軍と共にペロポネソスになだれ込んだ。…  
トルコ人はコリントスに進軍し、降伏した守備隊の半分をその場で虐殺  
し、残りの人々はとつておいてヴェネツィア人の見える所でナウプリア  
の「要塞の」壁の下で処刑した」。「一七一八年、パサロヴィッツ条約は  
ギリシア全土を再びトルコに明け渡した。かくしてギリシアは二、三の  
局所的な解放運動があっただけで、一八二一年に始まる革命まで隷属し  
たままであった」。これ以降、フェルトンはオスマン帝国によるギリシ  
ア支配の実態の説明に入る。メフメト二世は征服した領土の組織化に着  
手したが、ギリシアにトルコの制度を徹底的に確立するのは不可能であ  
り、ギリシアのバシヤらは帝国の他の諸州と同様に巨額の金でポストを  
買うなど、ギリシアにおけるオスマン帝国の支配体制は腐敗していた。

この様に述べた上でフェルトンは、帝国当局のギリシアに対する「苛斂誅求」をも詳細に描くのである。

征服された領土のキリスト教徒住民は *harach* と呼ばれる生命税を払う事が義務づけられていたが、これは当初自分の頭を肩につなげておく特権を得る為の妥協、又は譲歩と見なされていた。幾つかの場所ではこの税は子供については誕生時から支払われていた。他の場所では一定の年齢、つまり五才、八才、十二才、十五才からで、金額も様々であった。リーク大佐によると一大家族全体あたりの税は通常二ポンド程度だったが、この税を払わねばならないかなる個人も街での頻繁で不躱な職務質問にさらされており、合法的な領収書を取り出し損ねようものなら次の役所当局に、前に支払ったか否かにかかわらず支払うよう強いられた。地租は様々な時と場所での土地の生産物の二十分の一、十二分の一、十分の一、七分の一であった。各町の入り口で、牛、食糧、ワイン、薪について税が払われた。・・・

この部分では本来ジズヤ(人頭税)とあるべき所にハラージュ(*harach*)という部分に該当、地租の意)という言葉が使われている事から、フェルトンは両者を混同したのだと思われる。人頭税は「頭を肩につなげておく」生命税であったという説明は、その歴史の実態はともかく人頭税が少なくともその様な非人道的意味合いを持つ税として西洋の学者に認識されていた事を示している点で注目されよう。フェルトンは他にも様々な税と徴用を挙げているが、「誅求の体制があまりにもその範囲を

限定されておらず、その執行を委ねられた人々の権力があまりにも統制されていないので、悪が行政制度全体に広がった」状態であり、「普通の労働者階級であるレアヤーは農奴の状態に貶められ、あらゆる種類の抑圧にさらされ、自らの状況を改善するいかなる展望も可能性もなく、希望のない隷属と墮落の運命にある」というある英国人の観察を併せて引用している。

更には、親から引き離されイスラームに改宗させられたイエニチェリの悲劇も言及される。「それは時代が下つて十七世紀半ばまで続き、ギリシアのみによつて供給された総数は、アテネ大学の教授の一人の推計によると五十万人を下らないという。後には新規採用はイエニチェリの子供達からなされた。この軍事組織は一八二六年まで存在した」。一八二六年にスルタン・マフムトは彼らの権力が改革の妨げになると考え、イエニチェリの解体を決意したが、これに対して三万人が反乱に立ち上がった。しかしスルタンは五万の軍を差し向け、彼らを虐殺した。「かくして炎と刀によつて、キリスト教徒の捕虜、或いはキリスト教徒家族から暴力によつて引き裂かれた子供達の子孫であり、父祖の宗教を強制的に棄教させられ数世紀にわたつて暴君の道具やテロ集団となつてきた男たちの一団は滅びたのであった」。もともと強制的に連れて来られたキリスト教徒兵士が権勢を誇る存在になるや肅清されるという「トルコ人の理不尽な措置」を読者に暗に訴える様な響きが、この部分の叙述に感じられる。

またフェルトンはトルコ支配下のギリシアの荒廃ぶりを記す文人たち

の例を挙げつつ、この間にギリシア人の民族性を保持させた原因として四点を挙げている。

第一に、ギリシア人とトルコ人は道徳的・知的・社会的傾向が相容れなかつたため、ギリシア人が自らの抑圧者と結び付いて一つの人々になるのは不可能だった事である。

第二に、ギリシア人が精神的な能力の面で優越していたので、トルコ人としては物事の指示を現地指導者に任せざるを得なかつた事である。

第三に、キリスト教会へのギリシア人の消し得ぬ献身である。

最後に、トルコ人が決して従属させる事のできなかつたギリシアの諸部分があつた事である。北部の山岳地帯の戦闘的住民はトルコ人への従属を拒否し、僅かな貢ぎ物と引き換えに武器の保持を許されアルマトロイ（武器を持つ人々）と呼ばれた。又クレフテスと呼ばれた義賊の下では、トルコ人の妻や娘が手に入った時も繊細さと名誉をもって扱われ、「それは言うまでもなくトルコ人の習慣とは顕著な対照であつた。そして彼らは自らにされた残虐行為を人に対して報復する事は滅多になかつた」。クレフテスのバラッドは抑圧者であるトルコ人への敵意と、クレフテス生活の野性味あふれる魅力と、自然への愛をうたっている。「母よ、我もはやトルコ人の奴隷になる事能わずと汝に告ぐ、我はできぬ、我が心はそれに抗うなり。我銃を取り、行つてクレフテスとならん。．．．母よ我行かん、されど泣くことなかれ。我に祝福を与え給え。そして我らは祈らん、いとしの母よ、我が多くのトルコ人を殺める様にと。．．．おお我が母よ、花咲き出づる限り汝の息子はみまからずトルコ人と戦い

つつあるなり。そして悲しみの日、嘆きの日が来らば、二つが消え花散らば、その時我も殺されぬという事なれば、汝黒衣をまとうべし。．．．」。かくして十八世紀末にギリシア人の中に知的再生が起こつた。一八三三年にパリで亡くなつたコライスの呼びかけを機に人々は「民族と自由の聖なる大義」の為に武器を手に立ち上がったのである。<sup>(38)</sup> ここからフェルトンの叙述は、全篇のハイライトである「ギリシア革命」の章に進む。

### (iii) ギリシア独立戦争

フェルトンによれば、エカチエリーナ二世は一七六八年の露土戦争の際、古代の自由を取り戻すようギリシア民族を鼓舞し、ギリシア側にも呼応する動きがある中でロシア艦船をペロポネソスに派遣した。トルコ政府はアルバニア人をペロポネソスに投入し、虐殺でもつて反乱を鎮圧した。対露協力をしたりそれを疑われた諸州は戦争後に厳罰に処せられ、メレティオス総主教は拷問され追放された。スミルナのキリスト教徒は教会から出たところを無差別に虐殺された。デーワーン（オスマン朝のスルタンの御前会議又は閣議）ではこの機会を捉えてギリシア人種全体を根絶するのが賢明なのではないかという問題についても話し合われたが、ハサン・パシヤの影響により穏健派が優勢となり、クレフテスの助力を得て彼がペロポネソスの平定を任された。

一七八七年再び露土戦争が起こり、新たな興奮がギリシアを煽動する。ギリシア革命の特徴は、民族性と独立を取り戻すため「ギリシアから、

武器の力で、別の信仰を奉じている別の人種を追い出す事」をめざした点であった。それは「暴政・強奪・抑圧の習慣と、自らが大変長らく抑圧してきた人々への野蛮な主人としての軽蔑」を持つトルコ人と、「復讐願望が、優越した知性の意識や過去の輝かしい記憶によって鼓舞された祖国愛と入り混じった・・・」ギリシア人との間の、宗教的・人種的憎悪の対立であった。更にフェルトンが、野蛮なオスマン帝国と文明的なヨーロッパのキリスト教徒の戦いという、古代のペルシア戦争の構図を彷彿とさせる次の様な総括をしている事は注目される。「しかし結局それは、この世紀にそぐわない野蛮の、再生する文明とキリスト教信仰に対する死闘であった。そしてこの状況こそがあらゆる場所のキリスト教徒諸国民の心からの共感と、熱烈な祈りと、効果的な協力とを、ギリシアの大義の周りに結集したのである」(傍点引用者)。

当初ギリシア人は叛徒として扱われヨーロッパ諸政府の反応は冷たかったが、次第にギリシア側の大義に共感が寄せられる様になった。一八二一年に始まった反乱についてのくだりは、ギリシア人指導者の英雄的な死を描き、一八二二年一月の独立宣言を次の様に引用するなど、自由と独立の為の戦いであった事やオスマン帝国の暴政を強調した叙述となっている。「オスマン帝国の恐ろしい暴政の下にあるギリシア民族は、暴政の軛の類例なき重みに耐えられない・・・それは、我々の権利を奪還し、我々の存在と名誉を安泰にするという唯一の目的の為に行われる民族戦争である・・・しかしあなたの自由と独立を強化できるのは協約のみである・・・」ギリシア側の蛮行があった事も書かれて

はいるが、オスマン帝国側が行ったキオス島の虐殺等の方が目立つ描き方がされている。この虐殺についてギリシア側は悲しみと怒りに覆われたが反撃し、国際的な同情も高まる中、英国でもギリシアに協力する者が出てきた。トルコ政府はムハンマド・アリーにギリシア遠征を要請したためギリシアに危険が迫ったが、逆にこの危機がバイロンをはじめ多くのヨーロッパ人や米国人をしてギリシア応援に駆けつけさせたのであった。

一八二五年十一月のイブラーヒム・パシャのギリシア攻撃は次の様に描かれる。「虐殺と掠奪をしたがつているトルコ人とアラブ人が四方からなだれ込み、破壊と流血の所業を開始した」。「アテネは東ギリシアでまだ持ちこたえていた殆ど唯一の場所であったが、びっしり包囲された」。トルコ人らは間もなく町を制圧したが、包囲作戦はファヴィエ大佐とクライスカケースがアテネ平原に現れた事によって中断された。この戦いでアクロポリスにはかなりの被害が出た。クライスカケースが愛国的な死を遂げた後、流血の戦闘がアテネ郊外で行われた。六月五日に城砦は明け渡され、アテネ陥落はギリシア全土にわたって大打撃と受け止められた。米国では世論が喚起されて救援物資が送られ、英国世論も大きく変化し、正当化されぬ反乱を抑圧するオスマン帝国への以前の共感ほ消えて、ギリシアへの抑圧は人権に反すると見なされる様になったのである。一八二七年七月六日のロンドン条約は、ギリシアをスルタン主権下の属州とするが、帝国政府の承認の下に知事を選ぶ権利を持たせる事を提案していた。しかしオスマン帝国政府がこの様な内政干渉を拒

否したため、英仏露の海軍とトルコ・エジプト艦隊が対峙する事になったが、後者の完全な敗北という結果に終わり「ヨーロッパとアメリカは勝利と歓喜に沸いた」<sup>(60)</sup>。

以上のフェルトン執筆部分を総括すると、叙述に流れる一貫したイメージは、ヘロドトスの描いたペルシア戦争の構図——ヨーロッパ対アジア——の近代における再現である。象徴的な一例を挙げると、アクロポリスは古代にペルシア軍に焼かれた後、オスマン帝国がギリシア征服を進める過程で破壊され（二六八七年）、ギリシア独立戦争中にオスマン帝国側（イブラーヒーム・パシャの遠征軍）によって再び破壊された（二八二五年）と叙述されているため、直近の一八二五年の破壊は読者にとっては「アジアの蛮行」として既視感を持って受け止められたと思われる。ウィルソンら読者が、民主制と独立に輝いていた民族の栄光を取り戻すべくトルコ人の「暴政」に対して立ち上がったという本書のギリシア人像にアメリカ独立戦争の経験を重ね合わせたのみならず、専制的で野蛮な、イスラームのアジア（オスマン帝国）▽に対する民主的で自由を愛する、文明的なキリスト教ヨーロッパ（ギリシア）▽の勝利を、ヘロドトスの『歴史』のイメージの延長線上に「当然の帰結」として位置づけたであろう事も想像に難くない。ウィルソンは後のヴェルサイユ講和会議で米国によるコンスタンティノープルの委任統治を視野に入れるが、その時の彼が『ギリシア史』で鮮烈に描かれているコンスタンティノープルの陥落のイメージを胸に、西洋が十五世紀に失ったこの都市を今米国が取り戻すのだという歴史的な意識を全く抱いていな

かったとは断定できないだろう<sup>(61)</sup>。

#### 四 ウィルソンとオスマン帝国——東方問題とグラッドストンの人権外交をめぐる

##### (一) ウィルソンのグラッドストンへの傾倒

ウィルソンがスミスの『ギリシア史』を学んでいた頃に遭遇したのがオスマン帝国によるブルガリア蜂起の弾圧と、それに関するグラッドストンの論説「ブルガリアの恐怖と東方問題」（一八七六年九月五日）<sup>(62)</sup>である。ウィルソンが一八八〇年四月に書いた「グラッドストン氏、性格の描写」と題するエッセイはこの論説の事にはふれていないものの、自由主義者としてのグラッドストンに彼が並々ならぬ敬意を持っていた事を示している<sup>(63)</sup>。他方、ウィルソンが若い時から「トルコ人ムスリムの支配下に暮らしているキリスト教徒に深く同情的であった」事についてはラリー・ウルフ教授が指摘しており、後に自由党の首相となる二十四歳のアスキスが東方問題に関するデイズレイリの政策（自国の帝国主義的な利益を優先し、オスマン帝国政府による少数民族への抑圧は等閑視する政策）を無原則だと批判した論文をウィルソンが一八七六年に読んでいた事をも指摘している<sup>(64)</sup>。

この様にグラッドストンの論説自体をウィルソンが直接読んだ確証はないものの、その論説におけるグラッドストンの、反オスマンの・反トルコの、オスマン国内のキリスト教徒には同情的である傾向や、イ

ギリス政府がブルガリア人虐殺に明確に反対する人道外交を展開すべきだとする主張は、後の第一次大戦の戦後処理におけるウィルソンのオスマン帝国解体や、オスマン帝国とハプスブルク帝国内の少数派の保護という政策的方向性と極めて合致している。この様にグラッドストンの論説はウィルソンのオスマン帝国に対する考え方の形成に影響を与えたと考えられるため、以下この論説の概要を見る事としたい。

## (二) グラッドストン「ブルガリアの恐怖と東方問題」の概要

グラッドストンは、英国が支援してきたオスマン帝国がブルガリア人虐殺を引き起こした事の重大性を指摘する。彼はトルコ人がムスリムの中でも残忍で文明的でない事を強調するが、彼の議論は十九世紀西欧における主要なオスマン帝国観<sup>(6)</sup>の一つを代弁していた。

トルコ人種がどの様なものだったか、又どの様なものであるのかを大雑把な輪郭で素描すべく、手短に努力させて頂きたい。それは単にマホメット主義の問題ではなく、ある人種に特有の性格と複雑に組み合わさったマホメット主義の問題なのである。彼らはインドの穏やかなマホメット主義者でも、シリアの非常に勇敢なサラディンらでも、スペインの洗練されたムーア人でもない。彼らは全体として、彼らが最初にヨーロッパへ入った暗黒の日以来、人類の反人間的な一大標本であった。彼らがどこへ行こうと血の幅広い線が彼らの通った跡に染みを付けていたのであって、彼らの支配が及ぶ所、文明は視界から消えたのである。彼らは至る所で、法によ

る統治とは逆の、力による統治を体现していた。この世の導きとしては彼らは容赦なき運命論者であったし、あの世の報酬としては官能的な楽園を思い描いていた。

彼らは確かに軍事力の巨大な権化であった。この前進する災いはヨーロッパ全体を脅していた。それは・・・ヨーロッパ住民のヒロイズムによつて――それも一世代ではなく多くの世代にわたる――食い止められてきたにすぎない。かつて西洋キリスト教世界全体は、共通の敵への抵抗について共通の思いを抱いていた。そして宗教改革の熱く熾烈な闘争の真最中ですが、私が間違えていなければ、英国の教会ではローマ・カトリック教会の権力と影響力の長たる皇帝の、トルコとの闘争における成功を願う祈りが捧げられていたのである。

しかし、トルコ人が法とは対極の「暴」力を体现していたとはいえ、力による統治でさえも、トルコ人が所有していなかったような知的分子の助けなくしては維持され得ない。それ故に、世界の歴史では稀であったが残酷さや暴政や強奪の真只中に、ある種の寛容性が育つたのだった。キリスト教徒の生活の大方は軽蔑をもって放っておかれたし、統治の副次的な機能は主教に譲渡する事を許された。かくしてギリシア人種はコンスタンティノープルに惹きつけられ、この間ある程度トルコのイスラームの欠陥を精神の要素で補ってきたし、今この瞬間では、長らく知られ、それから非常に尊敬されている(と私は付け加えねばならない) ロンドン駐劄大使を帝國政府に与えているのである。・・・[10～11]

グラッドストーンは、この二十年間のオスマン帝国のヨーロッパからの借款の多くが帝国の軍備増強に使われた事や、クリミア戦争と一八五六年のパリ条約の後も帝国がキリスト教徒臣民に関する権利と義務を理解してこなかった事が、今回のブルガリアの事件の背景にあると考えた〔11～13〕。

・・・四か月近くが過ぎたが、その間にこの国では、ほぼ今まで不自然な死の様な静寂が維持されてきた。・・・六月に、何が起きているかについて我々に警告する声、殆ど孤独な声が確かに海上と陸上から聞こえてきた。語られた話がある政府の権限によって犯された大規模虐殺についてであった時、聞こうとする耳が不足していたわけではない。それは・・・我々が二十年にわたる恩恵をその為に入れた政府であり、我々はそれらの年月がどの様に使われたかを尋ねもせずに今年イギリスの名の下に強い支援を与える事によって、「他の」ヨーロッパ「諸国」に公然と刃向かったのである。それだけではなかった。というのもそれらの大規模虐殺は、その傍らでは虐殺自体の恐怖や悪名も色あせる程の犯罪と絡み合い、それらでもって相殺されたと発表されたからである。・・・〔13～14〕

グラッドストーンは、国会議員らがこの事件について政府に質問したが説得力ある答弁が得られなかったとし、英国はオスマン帝国に大使館のみならず領事や副領事のネットワークを持っているのだから、虐殺について大使館や領事館が何も知らないはずはないとする。一八七六年六月

二十三日の「デイリー・ニュース」紙の報道があった後もデイズレイリ首相の答弁は曖昧であった。記事が出た直後に何故電報という確認手段がとられなかったか政府は説明すべきだ、ともグラッドストーンは述べる〔14～16〕。

グラッドストーンは更に、デイズレイリが虐殺へのトルコ政府の関与を否定したり、〔両者「トルコ人とブルガリア人」の側の行為は、この様な状況下では必然的にそうである様に同じ位恐ろしく、残虐であった〕〔18、傍点原著者〕等と発言した事について疑問を呈する。グラッドストーンがこれらの根拠薄弱な首相の答弁に對置したのが、残虐行為を犯しているのは専らトルコ人でありブルガリア人ではないという内容の、米国の調査者による八月二十二日の米国政府への次の様な報告であった。「私はブルガリア人が無法な行為や残虐行為やそうした名称にふさわしい行為を犯したという事を全く見出せなかった。私は、トルコ人官吏から、その様な無法な行為のリストを入手しようとしたが無駄だった。・・・トルコ人の婦女子で冷酷に殺された者はいなかった。イスラーム教徒女性で犯された者はいなかった。ムスリムの男で拷問された者はいなかった。純粋なトルコ人村で攻撃されたり焼かれたりした村はなかった。掠奪されたムスリムの家はなかった。冒瀆されたり破壊されたりしたモスクもなかった」〔19、傍点原著者〕。グラッドストーンは米国によるこの調査を、中立的な人道的調査であったと高く評価する。

私は Schuyler 氏と、彼を現地に派遣した「米国」政府に感謝を表明する。

前述の通り、我々のいかなる報告によってもヨーロッパを納得させる事は手遅れで望めない。しかしアメリカはトルコと同盟関係になく同国に對する恨みもなく、同国の破壊によつて利益を得ようとしているわけでもない。米国はこの件の広く人道的な性格と重要性故にこれに加わつてゐるのであり、自国を誠実さから離れるべく誘惑したり、自国の目的を不純なものにしたりする「アメリカの利益」を持つていない。〔22〕

ウィルソンの様に政治学を学びグラッドストンを敬愛していた米国人青年がこの部分を読んだとするなら、米国の「人道的調査」へのグラッドストンのこの様な高い評価を一顧だにしなかつたとは考えにくいであろう。

ここで、グラッドストンはこの事件への英国政府の対応を振り返る。四月二十日にブルガリアで反乱が起き、五月初には抑圧の恐怖は頂点に達していた。五月九日にオスマン帝国駐劄大使 (Sir Henry Elliot) は、この時点ではブルガリアについての領事からの情報を持っていながつた様だが、ムスリムの興奮と武器購入を観察したので、英国臣民とキリスト教徒一般の保護のため、地中海の英海軍総司令官に艦隊をベシカ湾に移す事を要請した。要請は認められ外務省にも報告されたが、艦隊を送つた理由を政府が説明しなかつた為に、英国が艦隊でトルコを守つてゐる様に見える形で虐殺が進行した。漸く政府は「マホメット教徒の狂信の爆発」〔27〕からキリスト教徒を守る為に大使の要請によつて艦隊が送られたのだと真相を説明したが手遅れであつた。この数週間に英国がオ

スマン帝国に与えた物心両面の支援によつて生じた「害は修復されず、又され得なかつた」〔27〕とグラッドストンは述べ、その状況を打開する為に二点を要求している。その要求とは、トルコの領海に艦隊を置くのは人道的な目的の為だけだと英国政府が宣言する事、及び今回の様な事態の繰り返しを防ぐため他の列強と協力して有事の際に迅速・効率的に展開できるように艦隊を分散させる事であつた〔24〜28〕。

更にグラッドストンは事態の深刻さに鑑み、直ちに閣議を開いて三つの目標を達成すべきであるとする。第一にブルガリアをいまだに荒廢させているアナトリアな悪政、掠奪、殺戮を止める事である。第二に、ボスニアとヘルツェゴヴィナのみならずブルガリアからもオスマン帝国政府の行政的行動を将来にわたつて排除する事により、この政府の認可の下に最近なされた無法行為の再発に對して実効的な備えをする事である。第三にこれらの措置によつて英国の名譽を回復する事である〔31〕。次にグラッドストンは右記の、特に二つ目の提案に関わつて「トルコの領土的な一体性」という基本的な外交方針について論じる。彼は「領土的な一体性の維持」と「独立」を区別し、「トルコの領土的な一体性」を人道に反しない限りで従来通り維持しつつ、オスマン帝国政府から特定の地域の行政権を奪う事は可能だと論じた。

さてトルコの領土的な一体性については、私はそれが維持されるのを見るのをいまだに望む者である。但し私は、その願いが、更に高次の政策目標に優先するものとして扱われるべきだと言っているわけではない。という

のは、全ての政策目標の中で、人道こそが……第一義的で至高のものであるというのが私の確信だからである。私の信念は、この偉大な目的はトルコの領土的・一体性を維持する事によって傷つけられる必然性はないし、しかも他の重要な目標も達成されるだろうというものである[32]。「段落省略」

……トルコの領土的・一体性の原則を時期尚早に放棄する事に引き続いてあまりにも高い確率で起こりそうな大規模な争乱を……回避する、又は最低限少なくとも先送りする事は確かに賢明である。……[33]

しかし私は、ブルガリアの恐怖の再発の余地を残すという代償を払ってまでそうした危機を避ける、又は先送りする事には同意しないだろう。……この国の公衆は……トルコの一体性が、同国の際限ない野蛮さ、同国の制御なき野獸的な欲望の免責を意味しないかと恐れ始めているかも知れない。これらの懸念は……尤もなのだが、事実の観察に基づいて斥けてもよいと私は考える。我々は隣接するルーマニア州でほぼ決定的だと思われる証言を持っている。二十年間それはオスマン帝国政府に租税を払い、帝国政府の至高性を認めつつ、完全な自治又は自己統治を享受してきたのである。……その様な例が我々の前にあるので、我々としては少なくとも、トルコの領土的・一体性が損なわれる必要はないという事を望もうではないか。他方でヨーロッパは、本件が要求する最低限の措置、つまりヘルツェゴヴィナとボスニアからのみならず、かつこれら以上にブルガリアから、トルコ人の行政的支配を完全に引き上げる事をトルコに要求し、要請するのだ[33～34]。

更にグラッドストーンは、ブルガリアはオスマン帝国の主権下に置き続けるが、ブルガリアに対する帝国の行政権は奪ってブルガリアには自治を行わせよと主張する彼自身と、「現状維持」を主張するデイズレイリ首相との間に七月三十一日に論戦があつた事にもふれている。

……私はこの目標「騷擾のあつた州に自治を導入する事」がトルコの「領土的・一体性」と両立して達成できるかも知れないという希望を表明した。首相は……私が現状維持の再確立を推奨したと述べた。机の反対側から私は直ちに口を挟んだ。「現状維持ではなく領土的・一体性だ」と。首相は即座に、領土的・一体性とは事実上現状維持を意味する事が見出されるだろう、と答えた。……現状維持とはボスニア、ヘルツェゴヴィナ、ブルガリアにおけるトルコの行政的権威の維持を意味する。領土的・一体性とは外国国家を締め出すが、現状維持とはその国の住民を締め出し、トルコ人の空手形の約束、実体のない諸改革、癡猛な熱情、怪奇な治癒し難い日常の失政と共に、全てをトルコ人にとつておく（と私は恐れるのだが）事である。であるならこれ、つまり現状維持の再確立が、英国の政策を今のところ最新の形で示しているのである。……[34～35]

グラッドストーンは現状維持にこの様に強く反対した上で、英国がトルコの「一体性と独立」は自国の利益にとつて不可欠である✓と宣言する事で同国の犯罪と無能を看過している、という対外的印象を払拭すべく努める事を政府に求めた。「我々は文明化された人類の一般的な感情

と調和した位置に我々を置きたいのである。……我々はトルコ人に……理解させたいのだ。英国政府は英国の人々の感情を誤解し、故にそれを誤って体現してきたのだと」〔36〕。ブルガリア等の諸州が自治を始めれば「マホメット教徒の少数派」との関係で克服すべき問題が出てくるだろうが、ギリシアの例からするとそれらの困難は克服可能だとも彼は論じた。「それらはギリシアでは乗り越えられた。そして今現在、我々がチャールズ・トレヴェリアン卿の直近の証言によって知っている様に、エヴィア島のマホメット教徒地主らは同国の政府の下で満足して暮らしている。マホメット教徒がトルコ人と同義でない事は想起されねばならない。そしてこれらの州のどれも、概して、相対立する宗教や地元の人種の間の戦争の事例とはなっていない。……」〔37〕。

ところが最後に至ってグラッドストーンは、ブルガリアへの人道支援という現実的な提案に加えて、トルコ人の追放が問題の究極の解決であるという極めてラディカルな結論を提示するのである。

しかし私はこの大きく非常に嘆かわしい案件の、アルファであるのみならずオメガでもあるものに立ち返り、かつそれを以て締め括る。……私は我が国民に……我々の政府が……ブルガリアにおけるトルコの執行権力の廢絶を達成する事に於て他のヨーロッパ諸国と協力する事に全精力を注がねばならない、と要求し主張する事をお願いする。今やトルコ人に、唯一可能な方法によって、つまり自分達自身を運び去る事によって彼らの悪弊を運び去らせようではないか。私が希望するには、彼らのザプティ

イエヤムデイル<sup>(66)</sup>、彼らのビムバシヤ<sup>(67)</sup>とユズバシ<sup>(68)</sup>、カイマカムやバシヤは誰も彼も、一切合切の荷物と共に、彼らが荒廢させ冒瀆した州から立ち去らねばならない。この徹底的な厄介払い、この最も祝福された救済こそが、山また山と重なる屍の記憶、既婚女性や未婚女性や子供の等しく汚された純潔、侮辱され辱められた文明、神或いはもしそう言いたければアッラーの法、人類一般の道徳的感覚に対して我々がなす事のできる唯一の償いなのだ。……「改行」……かくも罪を犯した政府はかつてなく、かくも自らが罪に於て救いたい事を証明し、或いは同じ事だが、かくも改革について無能である事を証明した政府はない。……〔38〕-〔39〕

総括すると、以上のグラッドストンの論説には後のウイリソン外交との連続性を感じさせる要素が幾つかある。中でも領土的一体性の議論と、それに関わる人道外交の理念についての議論、更にはトルコ人追放の主張に象徴される「専制的で残虐な」オスマン帝国への反感が、それらの要素の筆頭に来るであろう。グラッドストーンはオスマン帝国の領土的一体性を維持しつつ、問題のあった州に対する帝国の行政権を奪って当該州に自治を行わせる事により人道的な目的を達成する事は可能であるとしたが、基本的には維持すべき領土的一体性すらも絶対的な原則とまでとは言えず、人道上維持できない場合もある可変的な原則であると論じた。つまり彼の自由主義外交に於ては人道という道徳的な理念や原則こそが最上位に来るのであり、その理念に悖る非文明的な残虐行為に対しては内政干渉も辞さないとする。人道上の理由で他国の主権が関わる領域に

介入してよいかという問題は、英国ではギリシア独立戦争の頃から深刻化し、十九世紀半ばにはJ・S・ミルが介入の要件を論じているが、グラッドストーンは一八七六年のブルガリア事件を機に、「人権外交」の理念を「原則なきデイズレイリ外交」と巧みに対比させながら一般大衆に分かりやすい形で明快に打ち出したと言えよう。しかしその人権外交の理念は、全体の文脈から分かる様に強い反オスマン帝国感情、反トルコ人感情と結び付いたのである。付言すれば、グラッドストーンがギリシア古典にとりわけ造詣が深かった事も、その強い反トルコ感情と無縁ではなかったと考えられる。

グラッドストーンの上記の思考がウィルソンに与えたであろう影響は、後にウィルソンがヴェルサイユ講和会議で打ち出した八原理原則に基づく外交<sup>(76)</sup>という信念、及び「十四か条」の中で可視化する様に見える。グラッドストーンを模倣したかの如く、ウィルソンは「十四か条」に於て帝国の領土的一体性と諸民族の自治を両立可能なものとして提示した。<sup>(76)</sup>しかしその後彼は大戦中のアルメニア人虐殺を考慮し、オスマン国内の少数民族を保護する「委任統治」という選択肢を視野に入れる様になった。<sup>(76)</sup>つまり帝国解体の可能性を否定しなくなったのであり、グラッドストーンと同じく領土的一体性より人道的考慮を優先させる方向に政策を転換したのであるが、このような政策転換の根底にあったオスマン帝国へのウィルソンの否定的な見方が、トルコ人の全面追放というグラッドストーンの一八七六年の主張と酷似していた事も見落とせないのである。<sup>(76)</sup>

## 終わりに

本稿ではウィルソンが大学時代に学んだギリシア古典とギリシア史の一部を実際に繙き、その一見古色蒼然とした教養が実は彼の民主主義観、更には東方問題への考え方とオスマン帝国観を育んだ可能性を指摘した。ウィルソンら十九世紀後半に青年期を送った米国人が、ギリシアの体現する「文明的で民主的なキリスト教ヨーロッパ」と、古代ペルシアやオスマン帝国の体現する「野蛮で専制的なアジア(イスラーム世界)」の対決として古代のペルシア戦争や近代の東方問題を捉えた事は、ウィルソンやその後の米國指導者が非西欧世界に対して展開する事になる「民主主義外交」「人権外交」の性格を考える上で重要である。ギリシア独立戦争がまだ熱い同時代性を帯びていた時代に若きウィルソンらがギリシアの古典や歴史を精力的に学んでおり、しかもその真最中にオスマン帝国によるブルガリア蜂起の弾圧が起こり、グラッドストーンがこれを指弾して人道外交を唱える論考を発表した事は、ウィルソンの心の中に、大学で学びつつあったギリシア史像と整合的に連続した東方問題のイメージを形成させたと思像される。ギリシア、続いてブルガリアなど「キリスト教徒少数民族」に対するオスマン帝国の弾圧政策はその後アルメニア人虐殺という形でも英米の耳目を引く事になり、ヴェルサイユ講和会議時のウィルソンに、オスマン帝国の事実上の解体と米國による委任統治の可能性を視野に入れさせる事になる。

本稿で扱った時期より後の政治史料と併せて巨視的に見渡すと、ウィルソンの「民族自決」原則が普遍的・抽象的な民主主義に由来するといふよりも、ギリシアの古典や歴史に重きをおく当時の教育によって育まれた彼自身の反オスマン帝国感情、及びムスリムに弾圧されてきたキリスト教徒少数派へのグラッドストンの人道的配慮<sup>27)</sup>と表裏一体の、極めて具体的な文脈で提唱された事実が浮かび上がる。本稿の考察の結果、冒頭で述べた「十八〜十九世紀の英米の民主主義観」には深くグラッドストンの、「キリスト教徒少数派の権利を専制的なムスリムの弾圧から守る。又その為には介入してでも戦う」という具体性を帯びた要素が含まれており、その様な考え方がギリシアの古典や歴史の学修を通じてウィルソンの思考に流れ込んだ可能性が強いという事を、本稿の主要な結論としておきたい。付言すると、一八五〇年代に『ギリシア史』を書いたミススやフェルトン、及び一八七〇年代に英米の大学でギリシアの古典や歴史を講じた教授たちはその様な「英米の民主主義観」のプリズムで（特に米国人の場合は自国の独立戦争と重ね合わせながら）ギリシア史、ひいてはオスマン帝国史やアジア史全般を解釈し、本を執筆し、学生に教えていたのであり、その意味で、ウィルソンの右記の観点が形成された背後には正にその様な、一過性に終わらない構造的な「英米の時代思潮」（今から見れば偏見を含んでいるが）が存在したと言えよう。

更に、グラッドストンが結論で述べたトルコ人の追放は、同時代的に見れば決して荒唐無稽なものではなかった。民族の集団追放は十九〜二十世紀に現実に実行された政策的選択肢であった。例えばアメリカの

所謂インディアンへの強制移住、オスマン帝国におけるアルメニア人の不毛の地への追放、英国委任統治領パレスチナにおけるアラブ人の土地からの追放と集団的移送論、ナチス・ドイツによるユダヤ人の追放（と最終的な虐殺）、ソ連におけるクリミア・タタール人の強制移住、第二次大戦後のズデーテン・ドイツ人のチェコスロヴァキアからの追放など枚挙にいとまがないが、この種の追放政策がグラッドストンの様な人道を掲げる自由主義者によって提唱された事の中に、民主主義的価値観を共有しない非西欧世界の人々に対しては英米の自由主義者は時に排除する態度を露呈した、という一見逆説的な事実を見る事ができよう。自由主義のこの逆説（民主主義や自由という欧米にとつて至高の価値観を共有しない相手は排除してもよいという発想<sup>28)</sup>）は、例えば大統領時代のウィルソンやF・ローズヴェルトにも見られ、今日でも米国の「民主主義外交」「人権外交」に強く見てとれる要素である。

最後に、本稿で取り上げた『ギリシア史』が「アジア人」のみならずスラヴ系の人々への偏見を滲ませている点について一言しておきたい。ギリシア社会に忍び込むスラヴ的要素についてフェルトンは次の様に述べる。「それらの」人種の知的資質は顕著に異なっている。ギリシア人は生き生きとし理解が早く、器用で雄弁で好奇心が強く、進取の気性がある。スラヴ人は愚鈍で無関心で、直接自らに関わらない事については関心を持つ方には容易に動かない<sup>29)</sup>。著者のこの様なスラヴ人への否定的な見方は、オスマン帝国がギリシア人の蜂起の際にアルバニア人ムスリムを送り込んで弾圧させた事<sup>30)</sup>なども関連していたと思われる。その

様な経緯を伏線としつつ同書は、山岳地帯のギリシア語の古詩にはトルコ人やアルバニア人を戦場で殺した記憶もうたわれているという記載と共に叙述を閉じるのであった。<sup>(81)</sup>この様な『ギリシア史』の叙述と、西欧におけるスラヴ人への無知や偏見の歴史<sup>(82)</sup>を併せ考える時、私は次の様な考察を禁じ得ない。すなわち同書に見出されるスラヴ人への無知と偏見、本来純粋なギリシア民族社会であるべき所にスラヴ人という劣等的要素が混入していると捉える視点もまた、ギリシアの古典や歴史を西欧の文明や民主主義と結び付けて偏重する教育や思想の所産であり、その様な偏見を含む視点こそが、西欧とは異なる特質を持つ東中欧に対する民族自決原則の機械的な適用（ウィルソンによる）とそれによる混乱や、ロシア革命に対する米國・西欧側の警戒心と軍事介入につながる「精神的な地下水脈」になったのではないか、というものである。今後の検証を要するが補足的結論としておきたい。

註

(1) 「はじめに」で述べた視点から書かれた関連論文として、二連の拙論を参照。  
 『アメリカの民主主義』の蹉跌——多数決原理と共存の崩壊 中東・南アジア・東中欧の事例から——『人文学フォーラム』第一三号、跡見学園女子大学、二〇一五年三月、六〇～四二頁。「アメリカ外交における『自由』と『介入』——戦間期と第二次大戦期に関するH・フーヴァーの著述を手がかりに——」『人文学フォーラム』第一五号、二〇一七年三月、九九～一二七頁。「民主主義の『西歐的』起源について——ウィルソン型アメリカ外交の

思想的源流をたどる一試論——」『跡見学園女子大学文学部紀要』第五六号、跡見学園女子大学、二〇二二年三月、三一～六二頁。「ジェイムズ・ミルとアジア——『英領インド史』におけるヒンドゥー・ムスリム両社会の分析から——」『人文学フォーラム』第一九号、二〇二二年三月、一一九～一四六頁。

(2) E・H・カー著、原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、二〇一六年（原著一九三九年）、六七～六九頁など。

(3) John Milton Cooper, Jr., *Woodrow Wilson: A Biography*, New York: Vintage Books, A Division of Random House, Inc., 2009, pp.14-15 によると、ウィルソンの父はスコットランド系アイルランド人移民の息子であり、母はスコットランドで生まれ教育を受けた父を持ち、母自身はイングランド生まれであった。少年期のウィルソンが英国思想の深い影響を受けて育ち、英国的なるものへの賞賛を抱いていた事については、Woodrow Wilson, *The Papers of Woodrow Wilson* [以下PWVと略記], Vol.1, Edited by Arthur S.Link, Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1966, p.21 (Editorial Note) などを参照。一八五六～一八八〇年のウィルソン関連史料を扱ったこの第一巻には、至る所に彼の英国への賞賛を示す文書が収められている。

(4) Cooper, op.cit., pp.14-15. 母は五歳の時に家族と共に米國に移住した。また母方の祖父が卒業したグラスゴウ大学はアダム・スミスが卒業し、教鞭を取った大学でもあった（スミスは一七五一年一月にグラスゴウ大学教授に就任して十三年間在任している）。十八世紀のグラスゴウがヴァージニアやメリランドと貿易上の結び付きが強かった事も（水田洋著『アダム・スミス研究』未来社、二〇〇〇年〔原著一九六八年〕、三四・四六・八七～八八頁）、ウィルソンの両親がウィルソンの誕生時にヴァージニアに住んでいた背景と全く無関係ではないと思われる。

- (5) ジョージア州への転居が幼少期のウィルソンに南部人としてのアイデンティティを与えた。彼によると四歳の誕生日の直前の一八六〇年一月、リンカンが大統領に選ばれ戦争になると通りがかりの人が話しているのを聞き、父に何を意味するのかと尋ねたという。父自身はオハイオで生まれ育ったが、熱烈に南部の大義を奉じていた (Cooper, *op.cit.*, pp.16-17)。その様な家庭に育ったウィルソンは後にプリンスストンの友人らとも南部人としての絆を共有する事になる (一例として一八七九年四月二日付の Francis Champion Garmany への手紙を参照: *PWW, Vol.1, p.473*)。南北戦争に関する彼の著述としては一八九五年の *Division and Reunion* がある。
- (6) Editorial note, *PWW, Vol.1, p.704*.
- (7) プリンストン時代の友人 Charles Andrew Talcott への一八七九年十二月三十一日付の手紙で、ウィルソンは法学の勉強に時に無味乾燥さを感じると打ち明けている。"To relieve my feelings, therefore, I wish now to record the confession that I am most terribly bored by the noble study of Law sometimes, though in the main I am thoroughly satisfied with my choice of a profession. ... But when one has nothing but Law, served in all its dryness, set before him from one week's end to another, for month after month and for quarter after quarter, he tires of this uniformity of diet." *PWW, Vol.1, p.591*.
- (8) *PWW, Vol.1, p.26*.
- (9) *PWW, Vol.1, p.52*.
- (10) *PWW, Vol.1, p.76*, Editorial Note (Wilson's Classroom Notebooks).
- (11) 一八七六年一月一日頃のノートに「一、二年次のリーディング・リストがある (*PWW, Vol.1, p.78*)」。彼はプリンスストンに入りたての頃 index return という辞書を自作しており、その種本の正確な特定は難しいものの、パークやカーライル以下本文に列挙した書物が種本に含まれていた事が分かっている。
- (12) 大学時代のウィルソンがアジアについて知り考える機会が全くなかったわけではない。例えば課されたエッセイの題目に「日本帝国」というテーマも含まれていた事を示す史料があり、インドの宣教師からヒンドゥー教について話を聞く機会もあった事が日記から分かる (*PWW, Vol.1, p.79, p.218*)。又彼が主力メンバーとして精力的に活動していたプリンスストン大学の Liberal Debating Club の議事録を見ると、イスラームと文明の進歩の関わり、東方問題への英国の関わり方や英国のアフガニスタン戦争の正当性、米国議会による中国移民の禁止の正当性などがデイベートのテーマになっている。特に一八七九年一月十八日の議事録に記載のある「アフガニスタン戦争を行った際の英国内閣の行動はアミールに対する正当化されない侵略であった」という論題はウィルソンが提起したものであり、その主張はデイベートの結果通った事が一月二十五日の議事録に記されている (*PWW, Vol.1, p.318, p.359, p.400, p.421, p.448-449, p.467*)。しかし概してアジアについての学生たちの関心は時事問題に関わっており、それら時事問題への洞察の基本となるべき学問的知識は大学の講義レベルでは殆ど与えられていなかった事も、史料から浮かび上がるのである。
- (13) ウィルソンはもはや在学しなかったが、ダヴィッドソン・カレッジの二年次のギリシア語の授業にプラトンの『ソクラテスの弁明』(前期の授業)、『クリトン』(後期の授業)、及びホメロスの『イリアス』(後期の授業)があった。

- た事が彼のメモから分かる (PWV, Vol.1, p.27)。
- (14) 一八七六年十月十三日の日記に『ギリシア史』の復讐があった旨の記載がある。PWV, Vol.1, p.209.
- (15) William Smith, *A History of Greece, from the Earliest Times to the Roman Conquest with Supplementary Chapters on the History of Literature and Art by William Smith, with Notes and a Continuation to the Present Time by C.C.Felton, Boston: Hicking, Swan, and Brewer, 1857, pp.iii-iv* (‘Preface of the American Editor’ by C.C.Felton) フェルトンは、米国でもその著作が非常に知られているスミスの素晴らしいギリシア史に、自分が現在までの部分を補足するのは同書をより興味深いものにすると考えたと説明している。その後には付されたスミスの序文(一八五三年十一月、ロンドン)では、同書が若い読者向けの教科書として書かれたという執筆意図が記されている。Ibid., pp.ix-xi.
- (16) ‘Self-Government in France,’ PWV, Vol.1, p.515.
- (17) Ibid., pp.517-518.
- (18) バークはフランス革命を正当化する程の専制はなかったとし、「かほどに偉大な建物を一挙に地上に倒壊すること然るべしとも我々に許すだけの潜在的諸悪とはそも何であり、如何に大きいのか、と極めて真剣に吟味するよう我々に要求するのです。事態をこのように眺める時、私はそこにトルコの専制支配を認めません。・私には、かような政府にはその卓越性を高め、欠陥を矯正し、その能力を改善して一種イギリス国家制度程のものにもなし得る価値が充分あったのではないかと考えざるを得ないのです」と述べて革命の暴力性を批判し、英国型の漸次的改革の重要性を主張している。エドマンド・バーク著、半澤孝麿訳『フランス革命の省察』みすず書房、二〇一八年(原著一七九〇年)、一六五頁、二二三～二四頁。
- (19) ウィルソンの日記にバークについての記載がある事については既出の註を参照。バークの著述がプリンス頓時代のウィルソンに与えた影響については、Cooper, *op. cit.*, p.28などを参照。
- (20) ‘Self-Government in France,’ PWV, Vol.1, p.519.
- (21) Ibid., p.522. 傍点原著者。トクヴィルは、フランス革命によって中央集権体制たる絶対王政が壊された様に見えるが実は逆で、中央集権化自体が革命の発端であり本質であったと論じた。「フランスでは十八世紀の初めに中央集権化が不思議なほど容易に確立されているが、これにはわれわれは驚かないのである。一七八九年の人々は旧制度の建造物を顛覆したが、その土台はその破壊者たちの魂そのものうちに残っていたのである。この土台の上に、人々は忽ちのうちに新たに、そしてかつてなかったほど堅固に、旧制度の建造物を再建することができたのである」。アレクシス・ド・トクヴィル著、井伊玄太郎訳『アンシャン・レジームと革命』講談社学術文庫、一九九七年(原著一八五六年)、一九一・二〇七頁。この論点をウィルソンは咀嚼して示したのである。
- (22) ‘Self-Government in France,’ PWV, Vol.1, p.523.
- (23) Ibid., p.527.
- (24) Ibid., pp.533-534, p.537.
- (25) PWV, Vol.1, pp.493-510. 一八八五年のウィルソンの最初の著書 *Congressional Government* の原型となったアイデアが含まれた論考である(‘Introduction by Walter Lippmann,’ in Woodrow Wilson, *Congressional Government*, Mineola, New York: Dover Publications, Inc., 2006, p.10; PWV, Vol.1, pp.492-493, Editorial Note)。
- (26) ‘Introduction by Walter Lippmann,’ p.11. Walter Bagehot, *The English Constitution*, Oxford: Oxford University Press, 2001. バジレットはアダム・ス

- ミスの伝記的研究でも知られる事から（水谷、前掲書、三九五～三九六頁）、ウィルソンがバジョットの著書の研究を通じて間接的にアダム・スミスの決定論的な世界観にも影響を受けていた事が推測されて興味深い（十八世紀のアダム・スミスのな思考がヴェルサイユ講和会議の指導者に影響を与えていた事はカーが指摘している）。Lord Macaulay, *History of England*, London: Heron Books, 1967. なお、John Richard Green, *Short History of the English People*, New York, 1877 に関してウィルソンは、一八七七年十月十七日頃に欄外コメント、一八七八年五月二日に同じ著者の四巻本の *History of the English People* についての賞賛をこめた書評、七月二十七日に同書についての包括的な欄外コメントを書いている（*PNW, Vol.1, pp.387-393.*）。
- (27) Smith, *op.cit.*, p.222.
- (28) *Ibid.*, p.223.
- (29) 『歴史』における国制についての議論は、ヘロドトスより百年後のアリストテレスの議論を先取りする内容である。アリストテレス著、山本光雄訳『政治学』岩波文庫、二〇一一年、一八一頁、一八八～一九〇頁など。
- (30) ヘロドトス著、松平千秋訳『歴史』上巻、岩波文庫、二〇二一～二〇二二年、三九二～三九六頁。
- (31) 『歴史』中巻、一九一頁。以下、引用文中の傍点は特別に断らない限り引用者が付した。
- (32) 『歴史』中巻、三〇三～三〇四頁。
- (33) 『歴史』下巻、一一七～一一八頁。
- (34) 『歴史』下巻、三二〇～三二二頁。
- (35) 『歴史』下巻、一〇一～一〇二頁。この賞賛は、前出のスミスの概評に於て言及されていた部分に該当する。
- (36) 『歴史』下巻、二〇五～二〇六頁。
- (37) 『歴史』下巻、二六七～二六九頁。
- (38) 『歴史』下巻、二七二～二七三頁。
- (39) 二つの世界大戦へのアメリカの参戦を前にした一九一七年のウィルソンの演説と一九四一年のローズヴェルトの演説には「自由の為の戦い」という共通の精神が流れている。詳しくは森まり子「アメリカ外交における『自由』と『介入』（前掲）、一一九頁。
- (40) 『歴史』上巻、一一～一二頁。
- (41) この様に述べている箇所もある。「インドに至るまでのアジア地域には人が住むが、インドから東の地はすでに無人の境で、その状況を語り得るものは一人もない。『改行』アジアの形状と大きさは右のとおりであるが、リビアは第二の突出部にある。・・・『改行』さて私には、リビア、アジア、ヨーロッパを区切って分離した人々のやり方が不思議に思われてならない。この三者の違いは決して小さくないからである。長さ（東西）からいえば、ヨーロッパは他の二者を合せた長さにわたって延びており、幅（南北）については比較にもならぬほど（の大きさ）」であると私には考えられるのである」
- (『歴史』中巻、三二頁)。
- (42) 『歴史』中巻、三五頁。
- (43) 『歴史』上巻、九一～一七八頁。下巻、二四六頁。
- (44) *PNW, Vol.1, p.196, p.209.*
- (45) *PNW, Vol.1, p.100.* スミスの原文では、Smith, *op.cit.*, p.110.
- (46) Smith, *op.cit.*, p.46.
- (47) *Ibid.*, pp.52-53.
- (48) *Ibid.*, p.107.
- (49) *Ibid.*, p.vii (フェルトンによる序文)。
- (50) ギリシア語文献はイスラーム世界に於てもアラビア語への翻訳によって保

全されたが、フェルトンはギリシア語文献の保全におけるこの様なイスラーム世界の役割にはふれていない。

- (51) Smith, *op.cit.*, p.571, pp.594-596.
- (52) *Ibid.*, p.570, p.593.
- (53) *Ibid.*, p.570, pp.581-585.
- (54) *Ibid.*, pp.587-588.
- (55) *Ibid.*, pp.591-592.
- (56) *Ibid.*, pp.596-600.
- (57) *Ibid.*
- (58) *Ibid.*, pp.601-606.
- (59) *Ibid.*, pp.607-614.
- (60) *Ibid.*, pp.615-627.
- (61) ランシングの回想によると、ウィルソンはコンスタンティノーブルの委任統治に本気で関心があった。Larry Wolff, *Woodrow Wilson and the Reimagining of Eastern Europe*, Stanford: Stanford University Press, 2020, p.34.
- (62) William Ewart Gladstone, *Bulgarian Horrors and the Question of the East*, New York and Montreal: Lovell, Adam, Wesson & Company, 1876. 以下この論説を概観する際に、頁数は本文中に「」で示す事とする。なおブルガリア蜂起については、佐原徹哉著『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人——』（白水社、二〇一四年）、三六～三七頁及び一四二～一四三頁をも参照。
- (63) このエッセイでウィルソンは、グラッドストーンがオックスフォード大学でギリシア・ラテン古典を深く勉強した後議會へ進出し、ホメロスを生涯の研究対象とした「詩的共感力と、理性のより冷徹な資質を奇妙に組み合わせた精神を持つ」スコットランド系の政治家であり、デイズレイリと比較

しても演説者として卓越していたと評している。P. *WW*, Vol.1, pp.628-629, p.635, p.637, p.641.

- (64) Wolff, *op.cit.*, p.16.
- (65) 第一次大戦期まで維持された西欧の主要なオスマン帝国観は、「トルコ人の血塗られた暴政」「西洋文明と決定的に異質なオスマン帝国」というものであった。David S. Katz, *The Shaping of Turkey in the British Imagination, 1776-1923*, Palgrave Macmillan, 2016, p.1.
- (66) グラッドストーンによれば、デイズレイリは八月になってもまだなお、イギリスから物心両面の支援を受けているトルコ政府に虐殺の罪があるのか否かという問題をかわし続けていた。Gladstone, *op.cit.*, p.20.
- (67) 十五世紀後半以来オスマン帝国領であったが、ギリシア独立戦争でギリシア領となった。
- (68) オスマン・トルコ語で警察官の意。
- (69) オスマン・トルコ語で地方行政官の意。
- (70) *اِسْمَانِي* (オスマン・トルコ語)。中佐に相当。
- (71) *اِسْمَانِي* (オスマン・トルコ語)。大尉に相当。
- (72) *اِسْمَانِي* (オスマン・トルコ語)。オスマン帝国下の様々な官吏や行政官を指す。軍では大佐に相当。
- (73) J.S.Mill, "A Few Words on Non-Intervention," *Dissertations and Discussions III*, New York, 1873, pp.238-263. 一八五九年に発表された論考。
- (74) グラッドストーンにはホメロスに関する著書がある。Gladstone, *Homer*, New York: D.Appleton and Company, 1886.
- (75) 「十四か条」の中で「領土的一体性」(territorial integrity) やそれを実質的に意味する語「主権」などは、「諸民族の」自治的發展」(autonomous development) や「政治的・経済的独立」(political and economic independence)

等の語とセットになつて使われている。例えば第十項ではオーストリア＝ハンガリー帝国について「The peoples of Austria-Hungary, whose place among the nations we wish to see safeguarded and assured, should be accorded the freest opportunity of autonomous development.」と述べられ、第十一項ではバルカン諸民族について「...international guarantees of the political and economic independence and territorial integrity of the several Balkan states should be entered into.」と述べられ、第十二項ではオスマン帝国について「The Turkish portions of the present Ottoman Empire should be assured a secure sovereignty, but the other nationalities which are now under Turkish rule should be assured an undoubted security of life and an absolutely unmolested opportunity of autonomous development.」と述べられている。つまり曖昧な表現ではあるものの、「十四か条」では少なくとも帝国の枠組みを解体するとは明言されておらず、帝国の一体性を維持しながら帝国内の諸民族の自治を実現するという方向性が提示されていた事になる。

- (76) ヴェルサイユ講和会議でウイilsonがコンスタンティノープルとボスフォラス海峡に対する米国の委任統治の可能性に驚くほど開かれていた事については、Wolf, *op. cit.*, p.17. ウィルソン政権下で任命されたキング・クレイン委員会の報告書（一九一九年八月二十八日）も、アルメニア、コンスタンティノープル、トルコ国家に対する委任統治を包括する、小アジア全体に対する米国の委任統治を勧告していた。The King-Crane Commission Report (Report of American Section of Inter-Allied Commission on Mandates in Turkey) を参照。
- (77) ウィルソンとグラッドストンのオスマン帝国観の類似性の指摘は Wolf, *op. cit.*, p.17. 但しウィルソンの否定的なオスマン帝国観は、右記のキング・クレイン委員会報告書の基本的トーンでもあり、当時の英米人が「体系的に」

共有した根深い感情であった事が窺われる。彼らが共通して受けた、ギリシア古典を偏重する教育の影響もあったと思われる。

- (78) 彼らが二つの世界大戦を「自由の為の戦い」として提示した事については既出の註を参照。つまり自由や民主主義を共有しない陣営を「敵」と見なしたのである。

- (79) Smith, *op. cit.*, p.576. フェルトン執筆部分。フェルトンは更に次の様に書いている。ギリシアを旅行するとあちらこちらでスラヴ人や他の外国人入植者の子孫に出会ふが、彼らが村全体を占有している事もある。アテネでさえはアルバニア人のみが居住している街区があり、アテネから十マイル行かない所でもギリシア語が通じない村がある。「今、最も不注意な観察者でさえもこれらの人々「ギリシア人とスラヴ人」を取り違える事はあり得ない。彼らの風貌や言語、精神的な特徴のいずれに於ても」(同上)。

- (80) 一七六八年の露土戦争の際にオスマン帝国政府がアルバニア人をペロポネソスに送り込みギリシア人を虐殺させたとミスが記している事については前出。Smith, *op. cit.*, pp.607-608. 又ギリシア独立戦争中の一八二五年にトルコ人とアラブ人が含まれる遠征軍を率いてアクロポリスを破壊したイブラーヒム・パシヤも、フェルトンは特記していないがアルバニア人であった。この様にスラヴ人の中でもアルバニア人はトルコ人側についてギリシア人への弾圧に廻ったとフェルトンは認識しているため、アルバニア人についての彼の叙述は好意的でない。

- (81) Smith, *op. cit.*, p.641.

- (82) ここで包括的に例を挙げる事はできないが、例えばロックは『統治二論』に於てロシア帝国やオスマン帝国の様な絶対王政国家についてはそもそも政治社会とさえ見なしておらず、同じヨーロッパでも東西を截然と區別して、政治体制における西欧の優越性とロシアの後進性を前提とした議論を

している（森、前掲「民主主義の『西欧的』起源について」、五七頁）。又ヴォルテールやルソーは東欧に魅せられたが現地に実際に行つて観察する事はなく、彼らの東欧観は多分に観念的であつた（Wolf, *op.cit.*, p.4）。